



追手門学院大学

成熟社会研究所 紀要

Center for Mature Society Research

第5号

2021.3



追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要

第5号 目次

研究ノート

- 「理」の“論理”/「情」の“論理”
日本語表現における「説明 \rightleftharpoons 理解」/「説得 \rightleftharpoons 納得」の言語過程とその構造…齊藤 一誠 1

研究報告

- 「ロジコミ・メソッド」開発経緯と今後の展開について……………佐藤友美子 11

研究ノート

- ロジコミ・メソッドの活用事例
—2020年度の講義での実践を通じて—……………今堀 洋子 21

プロジェクトレポート

- 学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録
—赤しそクラフトビール商品化までの産学連携と学生の成長の軌跡—
……………中川 啓子 27

活動報告

- 2020年度の活動記録…………… 35

研究ノート

「理」の“論理”/「情」の“論理”

日本語表現における「説明⇔理解」/「説得⇔納得」の言語過程とその構造

齊藤 一 誠

はじめに

コミュニケーション力は、いまや日本社会において、社会生活を営むうえで必須のスキルと位置づけられている。「コミュ力」が人生の“キャリア形成”に欠かせないという風潮が蔓延したために、その裏側で「コミュ障」という“病理”もまた誕生した。教育の場にはアクティブ・ラーニングが導入され、グループワークが推奨され、プロジェクトを基盤とした授業が展開される。その中で、学生はみずからの「コミュ力」を日々問い続けている。

しかし、事柄の是非を殊更に明らかにしない“協調的コミュニケーション”が蔓延する日本社会において、互いの意見の違いを発展的に止揚させてゆく“^{ロジカル}論理的コミュニケーション”のスキルを習得することは容易ではない。

そこで、追手門学院大学成熟社会研究所は、早くから“ロジカル・コミュニケーション”に注目し、学生の意識改革を促しながら、スキル習得過程をメソッドとして確立すべく、実践的な研究を続けてきた。

その活動の将来展開のために、ここでは日常的なコミュニケーションの場にあらわれる説明と理解、あるいは説得と納得の言語過程を、“論理”の身振りを観察しながら原理的に考察しておきたい。

普段の言語意識を取って言語伝達モデルに還元するのは、より自在な言語意識を獲得して円滑なコミュニケーションを実現するための方法的前提である。

I. 「理」の“論理”

1-1. “論理”と日常コミュニケーション

「論理」というものは、もともと思考の形式だから、それだけを取り出してみれば、概して味気ないものである。命題を吟味し、真に至るまで判定を繰り返す。そんな推論の条件と手順を厳密に記述しようとするれば、日常的な意味がまわりつく自然言語よりも、形式的に処理できる数学的演算の方が向いている。

そこで、たとえばフレーゲは、純粋な思考のために、算術の式言語を模して“概念記法 (Begriffsschrift)”なるものを考案し、独自の記号を使って厳密な論理表記を試みた。“ある判断に他の判断が含まれている”状況であれば、これを「 $\begin{array}{c} \text{A} \\ \text{---} \\ \text{B} \end{array}$ 」(「Bという判断に材料として判断Aが含まれる」)といった形で記述する。^[1]そして、そのように表記された命題を数学の演算のように操作しながら、「論理」を追求する。

ところが、それでも問題は生じるらしく、ヴァイトゲンシュタインは『論理哲学論考』で「フレーゲの『判断線』 $\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array}$ は論理的にはまったく指示対象をもたない。」と指摘し、「それゆえ命題などに付された番号と同様、命題の一部ではない」(4.443)と異論を呈している。また、別のところでは、フレーゲの概念記法は「なお十分なものではない」(3.325)と断じている。^[2]「論理」と「論理」の闘ぎ合い。

しかし、いかに厳密であろうと、このような記号による論理表記は万人向けとは言い難く、日常のコミュニケーションにとって使いやすい道具でもない。だから、われわれは専ら自然言語を用い、その中で“論理的に”ものを考え、“論理的に”表現しようとする。

ただしその際の“論理的”という言い方は、純然たる思考形式としての「論理」に比較すれば、かなり経験的な要素をまぶしながら、日常の言語を用いておこなわれる行為についての形容である。つまり、そこで

言われている“論理”は、日常生活の範囲内に或る種の曖昧さを帯びて存在する程度のものである、ということには、あらためて注意を向けておいた方がよい。

われわれが日常的なコミュニケーションにおいて目指す“論理”なるものは、真なるものの証明というレベルではなく、お互いが“筋道を立てて”話をする中で共通の“納得”に至る、という程度のことを目指しているわけで、そこでの“正しさ”への接近は、あくまでも、漸近的なものに過ぎない。

こんな言わずもがなのことをわざわざ諸言とするのは、「コミュカ」大事の風潮と相俟って“論理的”であることの重要性があちこちで強調される昨今、その言葉を万能の矛として、いささか教条主義的な眼差しを以て相手の発言を監視し、互いに裁き合うような空気がいつしか醸成されつつあるように感じられるからだ。

日常コミュニケーションにおける“論理”は、互いの“納得”や“合意”形成のために活用されるべきものであって、いうまでもなく、双方で反目しあいながら振り回す小理屈や、相手を論破するために鎧う“理論武装”の拠点とすべきものではない。

1-2. 意味伝達の機構

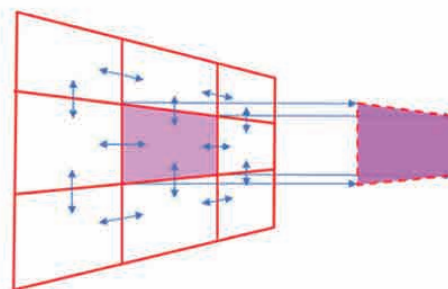
われわれが“論理的”に考えると、か、“論理的”に話すとか、“論理的”に書くという場合、それは概ね(1)話題の素材を適切に定義し、(2)それらの情報の繋がりを明確にし、(3)話の筋立てを分かりやすく整理して、(4)共通の理解に至ることができるように話の辻褄を合わせる、ということの意味するだろう。

その場合、話の“正しさ”は、双方の“理解”や“納得”の度合いによって浮動し、日常コミュニケーションにおいてなかなか一義的には定まらない。伝えてはみたものの、それが分からない相手に対しては、当初の言語表現を捨て別の言い方で伝え直してみる、ということによくあることだ。“論理”というものがその程度にあるとすると、そこで得られる“理解”というものもまた、いくばくかの曖昧さを含まざるを得ない。

もちろん、[話し手/書き手]は十分意識的に言葉や“論理”を準備するだろう。言語意識としては、いわばマス目状に平面展開された意味の広がりの中で特定の一つを指さすように言葉を選び、またそれらの情報を直列に繋いで、“明確”に発信するに違いない。その様子を図示すれば、<図1>のごとくである。[話し手/書き手]は「面」によって計画する、とい

うところに特徴がある。

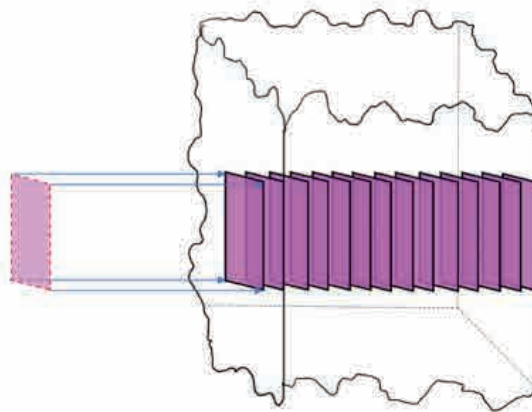
意味伝達：発信は「面」で計画される。



<図1>

ところが、[聞き手/読み手]がそれを受け取る際は、それらの言葉を自らの内なる“辞書”と引き比べて意味を計量し、“論理”を脳内の“思考の型”とあれこれ対照させながら、適切と思われる“論理”の祖型^{アーキタイプ}に諸々の情報を順序良く並べてゆかなければならない。一度でうまくゆかなければ、“論理”の祖型^{アーキタイプ}を取り替える手間も要る。そういう逡巡が、前述した“理解”の曖昧さの原因ともなる。この受信の様子を図示すれば<図2>のようになろう。[聞き手/読み手]が「層」で解読するところが特徴である。

意味伝達：受信は「層」で解読される。



<図2>

言語による意味伝達の過程には、このような断絶があり、発信の場と受信の場ではそれぞれ別様の言語意識が働いている。しかし、この分断があるからこそ、話し手の言い間違いを聞き手が修正することも可能になる。比喩や駄洒落の効果をコミュニケーションに生かすことができるのも、この懸隔^{ギャップ}があればこそだ。そうしてみれば、逆説的ではあるが、言語による意味伝

達の不安定さと曖昧さが、言語コミュニケーションの“正しさ”と“的確さ”を保証しているとも言えよう。

言語は、われわれが伝えたい意味をカプセルのようなものに詰めて相手に手渡せば、相手がそれを開けて詰められたままの意味を取り出す、という具合には機能してくれない。

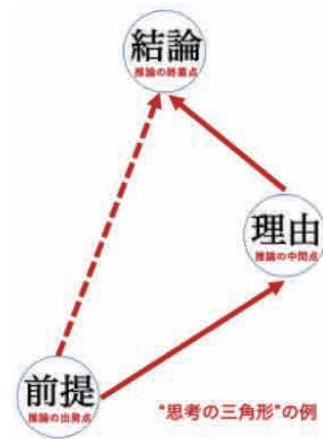
1-3. [説明⇔理解] の言語過程

意味伝達の過程をこのように仮定する時、“論理的”なコミュニケーションを言語表現において達成させようとする[話し手/書き手]が企図しなければならない事は、まず[聴き手/読み手]における意味のプレの振幅を最小限に制御することであり、つぎに思考の型を限りなく一義的に明示することである、ということになる。

その際、言葉の意味については、別のさまざまな言葉を組み合わせながら、その都度“定義”して話を進めるといことになろう。その機構をモデル化すれば、発信すべき言葉の選択が、まず連合関係にある言葉の縦列から適切なものを指定する作業によって行なわれ、つぎに横列をなす別の連合関係の中から先に選ばれた言葉を限定する新たな言葉が扱われて、それらを掛け合わせながら、意味の「面」から表現が引き出される、ということにもなるか。(＜図1＞)

他方、人間の思考の型に基づいた“論理的”言語表現については、統辞が既に在る論理的な思考の祖型アーキタイプのいずれかに当て嵌められて行なわれることで実現する。その中でも、特に“思考の三角形”ともいべき、三つの情報によって“論理”が構成されるパターンがいくつかあって、日常的コミュニケーションにおいても“論理”の規範として広く用いられている。

その代表的なものは「三段論法」であろう。“動物には命がある”という[大前提]を、“人間は動物である”という[小前提]が受けると、“人間には命がある”という[結論]に至る。また「弁証法」における[正](テーゼ: These), [反](アンチテーゼ: Antithese), [合](ジンテーゼ: Synthese)も、三角形の情報構造を持っていた。さらに日常生活では、[なにが][どうして][どうなった]という類の話法が定番である。(＜図3＞)



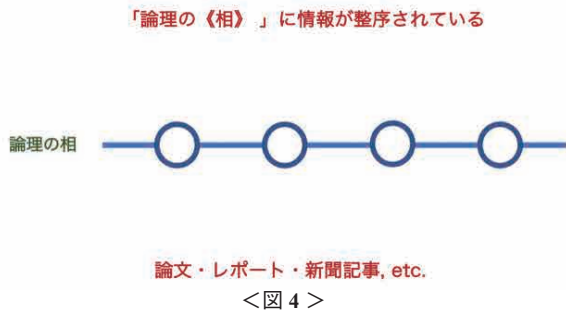
＜図3＞

そして、意味伝達の過程において意味のプレが制御され、情報配置の整合が達成されると、たとえばこのような表現が立ちあらわれるだろう。

小乗とは大乘に対して呼ばれるもので、元来は大乘者から名づけた貶称であるが、然し、現今としてはほとんど貶斥の意味はなく、唯区別として用ひられるのみである。然らば大乘と何れの点に区別が存するのであるかといへば、必ずしも明確になつて居るのではない。小乗、大乘よりも古くは聲聞乗、菩薩乗と呼ばれたが、これは所謂小乗の中に於ても修行者の機根素質を聲聞、縁覚、菩薩の三に分ち、それぞれ異なつた教又は道が存するとなし、その教又は道に乗と称して、聲聞乗、縁覚乗、菩薩乗と名づけて居る中の二に当たるものである。

(宇井伯壽『インド哲学から仏教へ』)^[3]

「理」(ことわり)という言葉の原義は「事を割る」であったが、ここでの“事割り”には情報の欠落がない。厳密に体系化された仏教用語が、著者による一撃のもと見事にひび割れて、情報の岩盤がつつぎに解体をくりかえしつつ、“論理”に導かれてわれわれの眼前に整序されてゆくかのようだ。その様子は＜図4＞に示すごとく、いわば「論理の《相》」の上に、定義された言葉=情報が、几帳面に、ぴったりと間を詰めて、等間隔で一列に並ぶ、という様態。「理」の“論理”を達成した[説明]の言語表現は、このような情報の配置において[理解]を獲得する。



では、それとは位相を異にする「説得⇔納得」の言語過程は、言葉のどのような制御によって可能になるのか。「情」の“論理”を探りながら考察を進めよう。

II. 「情」の“論理”

2-1. 「説得⇔納得」の言語過程

論文・論説・報道文など、「理」の“論理”を専らとする日本語表現と比較する時、たとえば小説・エッセイ・広告といったジャンルにおいて、“論理”が隅々にまでゆきわたっていることは必ずしも期待されていない。しかし石川淳は、アンドレ・ジイドの『法王庁の抜け穴 (LES CAVES DU VATICAN)』を翻訳したその「あとがき」に、こう記した。

すべての理屈に反して、小説の世界は窮屈な印象をあたえるべきものではない。ジイドさんもどちらかといえば堅いほうの人だが、この作品は堅きに偏さない。理屈の中のユトリ。ときに笑いをさそうようなユトリがなくては、理屈もまた完全にはひとを納得させることができないだろう。これはときどきおもい出してもよい小説の論理である^[4]

小説にも“論理”がある、という。しかしそれは「理」の“論理”とは別物のようだ。「理屈の中のユトリ」、「ときに笑いをさそうようなユトリ」が「ひとを納得させる」ためには欠かせないようで、これを「小説の論理」と呼んでいる。そこでは、読者の「理解」というよりは「納得」を目指す言語操作が企まれており、その意味で「説明⇔理解」の達成を支える「理」の“論理”とは言語過程の位相を異にする。

その「理屈の中のユトリ」を、ここでは広告文における言語作用に観察しておこう。「おしりだって、洗ってほしい」というキャッチ・コピーではじまる

TOTO ウォシュレット発売直後の広告文である。

頭を切り替えるって、タイヘンむづかしい。拭く、と思いこんでいたものを、いきなり「洗うのがタダシイ」と言われも、ハイそうですかとはいかない。今までの人生を間違いだというのか、と。

いえ、たががおしりの話でもですね、つい感情的になってしまう。でもね。冷静に考えると、なるほどタダシイ。「拭くより洗うほうがきれい」その通りですね。「拭くより洗うほうがやさしい」これもその通り。おしりほど傷つきやすい場所はないって、日本人ならタイほど知っているものね。

だから洗いましょう。いいことなら習慣にしていましょ。だって「日本人のおしりは欧米人より清潔でない」なんてウワサが広がったら、困るものね。

(仲畑貴志, TOTOウォシュレットの広告)^[5]

1980年当時、それまで誰ひとり見たこともなければ聞いたこともなかった温水式洗浄便座という新製品を広告するにあたり、コピーライターは未知との遭遇に違和感を覚え反発する人々の反応を予測し見据えた上で、意図的に「ユトリ」をつくり出しながら、この広告文を書いている。

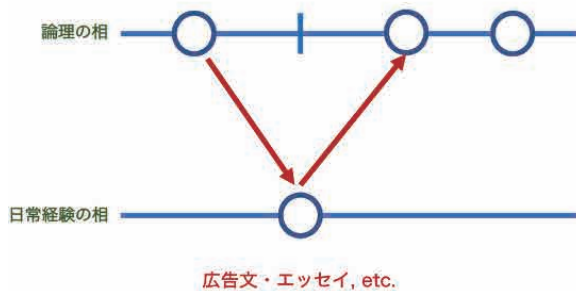
すなわち、「頭を切り替えるって、タイヘンむづかしい。拭く、と思いこんでいたものを、いきなり『洗うのがタダシイ』と言われても、ハイそうですかとはいかない。」と理屈をきちんと並べながらも、「今までの人生をまちがいだというのか」と、読者の反発を即座に代弁し、その上で「いえ、たががおしりの話でもですね、つい感情的になってしまう」と、話を取めている。

注目すべきは、ここに投入された「今までの人生をまちがいだというのか」というようなフレーズだ。この叫びは、文脈を“論理的”に展開させようという立場からいえば、感情の乱入であり、到底ほめられたものではない。しかし読者は、むしろこの一言によって、この広告文を好感する。そして、秘められながらも一貫する“商品を売らんがための論理”を、いつしか受け入れてしまうのだ。その結果もたらされるものは、単なる「理解」というよりは「納得」と呼ぶにふさわしい、読者の心の動きが反映され生活実感を伴った理解である。

では、その「納得」がどこからくるかと言えば、あえて「論理の《相》」を外した言葉の操作による。す

なわち、「今までの人生をまちがいだというのか」というフレーズは、「論理の《相》」から発せられて「日常経験の《相》」に至り、そこで「そうだ、そうだ」という“共感”を得て跳ね返り、再び「論理の《相》」に戻ってくる。その様子は、〈図5〉のように図示できるだろう。

「論理の《相》」と「日常経験の《相》」の間を情報が往き来する



〈図5〉

広告文の目的は、大枚何十万円をはたいてウォシュレットという商品を買わせるための「説得」である。商品の長を完璧に「理解」させたとしても、購入という行動に結びつかなければ、コミュニケーションは失敗だ。そこで、コピーライターは「論理の《相》」の上に情報を几帳面に並べるといふ論理性をあえて破る。われわれの日常感覚に訴えかけるフレーズをさまざまに投入し、運動させる。

その言葉は「日常経験の《相》」で跳ね返ってふたたび「論理の《相》」に戻るのだが、その時に既に「論理」のステップをいくつか飛ばしている。しかし、「日常経験の《相》」において“共感”を獲得しているので、それを跳躍板として、読者の「理解」はかえって加速されるのである。

そして「理解」が“共感”の裏打ちを得たとき、「笑いをさそうようなユトリ」と共に、そこに「納得」が生まれた。「説得⇔納得」の成立であり、「情」の“論理”の帰結である。

2-2. 「説明⇔理解」/「説得⇔納得」の言語構造

では、日常のコミュニケーションにおける「理」と「情」、ここでいう「説明⇔理解」/「説得⇔納得」の言語過程は、いかなる意味伝達の構造を前提としているのだろうか。

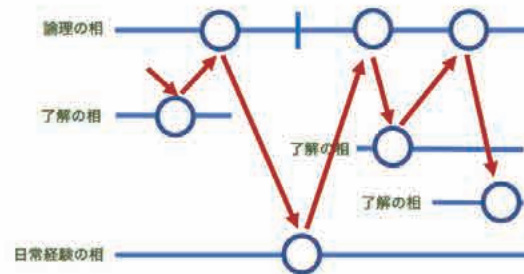
ただちに明らかなことは、「理」の“論理”による「説明」において、「話し手/書き手」から「聴き手/読み手」に対しては直接「理屈」に訴えて言葉が発せられるのに対し、「情」の“論理”による「説得」では、「話し手/書き手」は「聴き手/読み手」との間

に何らかの《了解事項》をあらかじめ想定している点だ。

さきほどの広告文で言えば、コピーライターは、いきなり「洗うのがダダシイ」と言われた時に感ずるであろう人々の反発を予想していた。すなわち、読者の気持ちを日常レベルの《了解事項》としてあらかじめ共有していた。そして、その上で、まさにそのような気持ちにこそ狙いを定めて、「いままでの人生を間違いだというのか」という一句を書いた。その結果、広告の読者は術索にハマリ、「理」というよりは「情」の発動によって、広告コピーの“論理”を受け容れた。

このように、「説得⇔納得」の過程にはおいて、「話し手/書き手」は「聴き手/読み手」との間にあらかじめある種の《了解事項》を前提することによって、それを支えに、「情」の“論理”によるコミュニケーションを成立させようとする。《了解事項》は、日常経験にとどまらず、引用、伝聞、譬え話などで随時形成することができるから、意味伝達の一般的な言語構造としては、〈図6〉のように「了解の《相》」を常に複数想定することができるだろう。

「論理の《相》」「日常経験の《相》」「了解の《相》」で表現を制御する

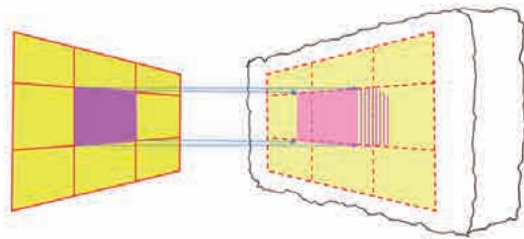


〈図6〉

これに対し、「説明⇔理解」の言語過程においては、《了解事項》を抜きにして、意味伝達におけるすべての言葉と情報を、〈図4〉のように、専ら「論理の《相》」に追い込んでゆこうとする。

この「説明⇔理解」/「説得⇔納得」の言語過程を、あらためて意味伝達モデルで捉えなおせば、〈図7〉のように描くことができるだろう。

意味伝達：発信は「面」で計画され、受信は「層」で解読される。



〔説得⇔納得〕の言語過程では、あらかじめ「了解の《相》」が想定される。

<図7>

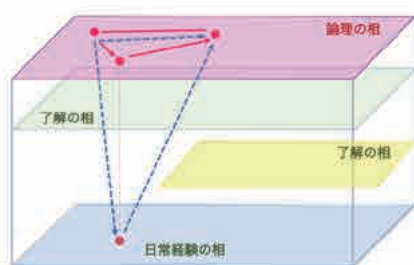
すなわち、〔説得⇔納得〕では、その「層」の中の特定のものが《了解事項》として想定され、コミュニケーションに際して意識的にそこが狙われている。〔話し手/書き手〕が「面」で設計して発信し〔聞き手/読み手〕は「層」でそれを受信して適切な層を自ら探る、という〔説明⇔理解〕の言語過程とは異なり、〔説得⇔納得〕における〔話し手/書き手〕は、〔聞き手/読み手〕が「層」に意味を探る前にあらかじめ特定の「層」に狙いを定め、これを潜在的に活性状態^{アクティブ}とした上で、コミュニケーションを試みる。

2-3. 〔説明⇔理解〕 / 〔説得⇔納得〕の言語位相

ここに至ってわれわれは、〔説明⇔理解〕の言語過程を観察した時に見出した“思考の三角形”に対応する別種の“三角形”を、位相を異にする〔説得⇔納得〕の言語過程においても発見することができる。それは“感動の三角形”ともいうべきもので、その特徴は、なんらかの「了解の《相》」を跳躍板として言葉が運動する結果として形成された“三角形”であるという点にある。

そしてその所在は、“思考の三角形”がもっぱら「論理の《相》」の平面上における情報の配置によって「理」の広がりの上に形成されるのに対し、こちらの生成は「日常経験の《相》」や「了解の《相》」の層における「情」の深さの中で行なわれる。これら二つの位相を統合して<図8>に示そう。

意味伝達の言語構造における、“思考の三角形”と“感動の三角形”の形成



<図8>

〔説明⇔理解〕の位相において、“論理”は“思考の三角形”を形成しつつ、「論理の《相》」の上に展開されている。情報の受容は感情に拠らず行なわれており、そこに〔理解〕が実現している。そのとき“論理”は、「理」の“論理”として振る舞う。

他方、〔説得⇔納得〕の位相において、“論理”は「論理の《相》」から発しながらも、「了解の《相》」や「日常経験の《相》」と関わりつつ、“感動の三角形”を形成している。感情を拠りどころとする“共感”が支えとなって〔納得〕が実現しており、そのとき“論理”は、「情」の“論理”として振る舞う。

したがって、およそ日本語表現において“論理”というものを実現しようとするれば、「理」と「情」という、この二つの面を睨みながら、その場のコミュニケーションにとって適切な“論理”が成立する条件を整えてゆく必要がある。

では、その調整作業は言語操作の現場でどのようにおこなわれるのか。日本語表現における「理」の“論理”と「情」の論理との関係、すなわち言語過程における〔説明⇔理解〕の位相と〔説得⇔納得〕の位相を、言語構造として透視すれば、その特徴は、これまでの考察を踏まえて次のように要約できるだろう。

III. 日本語表現における〔説明⇔理解〕 / 〔説得⇔納得〕の言語過程とその構造

3-1. 〔説明⇔理解〕の言語過程と「理」の“論理”

〔話し手/書き手〕は、意識的に言葉や“論理”を準備する。発信すべき言葉の選択は、連合関係にある言葉の列から適切なものを指定する作業によって行なわれる。その際、言葉は一系列の連合関係の中から扱われる場合もあるが、複数の連合関係を掛け合わせながら、表現として引き出されることもある。それは、いわばマス目状に平面展開された意味の広がりの中で特定の一つを指さす行為としてイメージすることができる。そして、統辞において形成された文は、論理的思考の祖型に当て嵌められて発信される。この過程は、十分意識的になされるので、言説は「面」において計画され、発信されると述べた。

これに対し〔聞き手/読み手〕は、発信された言説を、意味のさまざまな可能性を孕む「層」で受けとめる。そしてそれらの言説の統辞を解き、瞬時に各々

の言葉を自らの内なる“辞書”と引き比べながら意味を計量する。また、自らに思考の型として蓄えられた“論理”の祖型から適切なものを引き出し、そこに情報を配置してゆく。この過程は、最適解が得られるまで繰り返される。その結果として、言説は「論理の《相》」に展開される。

発信すべき言葉の選択が連合関係にある言葉の列から適切なものを指定する作業であるというのは、たとえば早朝の草に宿る水滴の輝きを、言葉により意味として形成しようとする時、「光る＝冷たい＝透きとおった＝…」という形容の連合と、「水玉＝雫＝雨つぶ＝…」といった名の連合を思いつつ、それらを掛け合わせながら、“冷たい雫”、“透きとおった水玉”、“光る雨つぶ”……といった表現を抜き出すということであり、それらを比較考量して最終的な言説を決定するということだ。

この作業過程のイメージを、「いわばマス目状に平面展開された意味の広がりの中で特定の一つを指さすようにして言葉を選び」と記した。それを“「面」で計画する”とも約言した。

選択された言葉（情報）の配置については、たとえば、思考の型としての“思考の三角形”を想い浮かべ、そこに言葉を散りばめる、といった作業になる。しかし、言語表現としてはその線形性（一方向に進み、逆進が不可能な性質）を逃れることはできないから、「情報を直列に繋いで発信する」というイメージになる。すなわち、『論理の《相》』の上に、定義された言葉＝情報が、いわば几帳面に、びつたりと間を詰めて一列に並ぶ様子である。（<図4>）

日本語表現において、[話し手/書き手]から「理」の“論理”に基づいてなされる[説明]は、このように、言葉の選択と情報の配置という二重の言語操作を経て実現される。そして、[聴き手/読み手]におけるその“理解”は、形式的に言えば、この過程を逆に辿ることによってなされるだろう。ただし、計画された発信とは異なり、受信は偶発的なので、言葉の意味はけっして一義的には定まらない。言説を『層』で受ける」と言ったのは、その不確定な事情を指していた。

3-2. [説得⇔納得]の言語課程と「情」の“論理”

「情」の論理においては、さらに二つの要素を調整する必要がある。そのひとつは発信する言葉を響かせるべき意味《相》の選択にかかわり、もうひとつは選択された意味《相》で言葉をリバウンドさせる角度の

設定にかかわる。

[話し手/書き手]は、[説明⇔理解]過程における明確な意図に加え、あらかじめ[聴き手/読み手]が保有する意味の可能性を意識し、その「層」の中に、「了解の《相》」を発見する。あるいは、引用、例示、比喩、また対句などの修辭法と化した思考の型を援用しつつ、その都度手作りで形成する。そして、特定の「了解の《相》」に狙いを定めて発信する。

このとき「了解の《相》」への入射角と、そこから再び「論理の《相》」へ向かう反射角が、あらかじめ決定されている必要がある、それは、「論理の《相》」と「了解の《相》」との間に“三角形”を形成する際の、それぞれの頂点における“共感”の緩さ/鋭さとしてイメージできる。ここに形成される“三角形”を、「論理の《相》」の上に展開される“思考の三角形”と対比させて、“感動の三角形”と呼んだ。

これを受信する[聴き手/読み手]は、言説の処理を「論理の《相》」において行ないつつ、「了解の《相》」へ届いた言説が励起する意味をも意識する。そして、そこに生じた「了解」的意味を「論理の《相》」に投げ返し、「論理」的意味と重ね合わせながら、意味の響きを言語的“和声”として感受する。その上で、“和声”を構成音としての言葉の意味に還元し、「論理の《相》」に配置された情報とあらためて対照させつつ、位相の違いを統合しようとする。かくして、発信された言説の意味は、「論理の《相》」と「了解の《相》」の間の中空に、いわば三次元的な意味の立体として、定位される。

このように、「情」の論理が成立するかどうかの要諦は、意識下に潜む「了解の《相》」の発見と、その活用にある。あらかじめそれがコミュニケーションの相手に潜在すればこれを使い、なければ現場で作りながら話を進める。そこで達成されるのは、[理解]というよりは“共感”にもとづく[納得]であった。

ちなみに、アジテーションの演説から御涙頂戴の物語まで、およそ人の心を動かして何らかの効果を得ようとする企みは、この[説得⇔納得]の言語過程を、単独の表現から文脈にまで拡大して活用している。人々の“心の琴線に触れる”というのが、特定の言葉や状況に共振して音を奏でるその“琴線”は、ひとつの「了解の《相》」である。

たとえば『イーリアス』を朗誦する者、そして『平家物語』を語る琵琶法師は、この“琴線”をしかと心に想い描いていたに違いない。『イーリアス』第6巻、ヘクトールとアンドロマケーの別れの場面では、戦場

に赴く夫の身を案ずる妻の悲しみを、青銅の武器に鎧った父が顔を見ようと近づいた時に怯えむずかる乳飲み子の無垢な仕草で際立たせる。一方、『平家物語』の「維盛都落」の場面では、妻である北の方との間でしみじみと哀切の言葉を交わした後、いよいよ維盛「思ひ切つてぞ絶たれける」と、張り詰めた心の糸がふっ切れたかに見えたとき、「若君、姫君走り出で」「父の鎧の袖、草摺りに取りつき」「慕いなき」して「これされば、いづちへとて渡らせたまふぞ。われも参らん、われも行かん」とすがるのである。

いずれの場合も、事情を察することができない子どもの姿が、事情を「理解」した聴衆の「納得」を涙というかたちで誘う。世の東西、時代の古今を超えて存在する“心の琴線“、または「了解の《相》」。ここでは、言語表現における“感動の三角形“が物語展開の上に拡大投影され、“感動の大三角形“として働いている。

3-3. [説明⇔理解] / [説得⇔納得] の言語過程とその構造

「理」の“論理”による日本語表現の言語過程を《相》の言語モデルによって透視するとき、そこでは言説の発信にとって、水平方向に広がる連想の範囲（拡散）を制御することが重要である。他方、「情」の“論理”による日本語表現にとって重要なのは、垂直方向に深まる連想の深度（深さ）を制御することである。

「理」の“論理”による日本語表現において、情報は、「論理の《相》」の上に平面的に配置される。ここでは言葉の選択と情報の配置が重要である。言葉の選択にあたってはそれによって励起される情報の抽象度が同レベルである必要があり、情報の配置については情報相互を最短距離で結ばなければならない。

論文やレポートの文章のライティング指導において、「係り」と「受け」に注意しよう、とか、「一文一情報」で「短い文章を積み上げよう」などといわれるのも、「理」の“論理”が日本語表現に要請するような条件を充足するための、いわば方便であろう。

そこに出現する明晰性、それは言葉が含む意味のブレを制御して一義的な使用を目指すとともに、意味の関係性においては平面的かつ直線的な展開を目指して情報が配置された結果として感得される。

そのとき人は、自らが為すべき解説と解釈の労苦や己れが消費すべき推理・推論のためのエネルギーを、言語表現の方が肩代わりしてくれたと感じ、ほっとし

た解放感を味わっている。それを良しと認識する心の習慣が、「理」の正体であり「理解」の根拠である。

これに対し、「情」の“論理”の場合は、そのコミュニケーション以前にあらかじめ想定される潜在的な「了解の《相》」を足場として、感動が平衡状態にある「了解の《相》」の均衡をあえて崩すように、「論理の《相》」から言説を投射する。その結果、これが刺激となって「了解の《相》」は揺らぐ。揺らいだ了解の《相》は、活性状態になり、不安定になる。

すると、その反作用として、人間の感情はただちにその不均衡を察知し、これを解消しようとして言語意識は即座に動きはじめる。その結果、「論理の《相》」と「了解の《相》」のあいだに、“感動の三角形“が形成される。不均衡を察知した感情が平衡に向かおうとする動き、そのダイナミズムこそが、人間が認識し感得する“感動”の実体であり、「納得」の根拠である。

このように、言葉の発信と受信において、われわれの言語意識は常に、「面」と「層」という二様の過程を循環し、「論理の《相》」「了解の《相》」という二つの位相を往還している。それぞれには超えることのできない分断と断絶があり、性質を異にする“論理”の発現がある。しかし、言語意識はこの懸隔を乗り越え統合しようとする。人間の思考と感情の動きは、言葉の意味の拡散（広さ）と深度（深さ）を制御することによって言説となり、発信され、受信においては、意味が、「層」における解説の計量過程を経て、「論理の《相》」の上または「論理の《相》」と「了解の《相》」の中空に定位される。言語活動によって生じた意味は、この時認識され、言語活動を担う双方に共有される。

言葉の意味は、このような言語過程を経ることにより、その場における1回限りの発信/受信を超えて、反復・再生が可能な共有化されたものとなり、そのことを以って、日本語表現によるコミュニケーションが成立する。

おわりに

「理」の“論理”、「情」の“論理”という観点から、日本語表現における「説明⇔理解」/「説得⇔納得」の言語過程とその構造を、《相》の言語モデルによって考察した。「理」の“論理”と「情」の“論理”を達成しようとして働く言語意識は、それぞれ言語過程の位

相を異にしている。それらを二様個別に探究するため、言語意識の運動方向を水平方向（広さ）と垂直方向（深さ）に分けたが、これはあくまでも便宜的なものである。位相が異なるこの二つの運動によって達成される意味伝達は、実際の言語活動においてはひとつの現象である。

したがって、日本語表現の現場においては、それら兩位相を含む言語機能空間をまず念頭に置く必要がある。（＜図8＞）その上で言語活動を調整することが重要で、たとえば“論理的”であろうとする場合も、「理」の面を“純化”するというという発想ではなく、「情」「理」両面における意味伝達の可能性を一旦全面的に開放した上で、場面に応じて兩位相の適切な度合いを調整する、という視点から表現活動を目指した方が、日常的なコミュニケーションにとっては有益であろう。

「理」の“論理”による〔説明⇔理解〕の言語過程と、「情」の“論理”による〔説得⇔納得〕の言語過程とは位相を異にする。しかし、その異なる位相の現象を自在に往来し、日常コミュニケーションにおける言語意識にその違いを感じさせぬままに、「理」と「情」の“論理”をひとつのものとして実現するというアクロバティックな運動が、言語にはある。その運動を可能にしているものが、言語の《記号作用》である。

今回の考察を踏まえ〔説明⇔理解〕/〔説得⇔納得〕の言語過程についてさらに精緻な観察と解析をするためには、言語《記号》の活動領域に視点を移し、その振る舞いに基づいて探究を進めなければならない。

註

- [1] フレーゲ (1879), 『概念記法』(フレーゲ著作集 (1)), §5, p.15, 勁草書房, 1999年。
- [2] ヴィトゲンシュタイン (1921), 『論理哲学論考』(野矢茂樹 訳: 岩波文庫 青 689-1), p.33, p.65, 岩波書店, 2003年。
- [3] 宇井伯壽 (1976), 「小乗佛教」, 『インド哲学から佛教へ』所収, p.299, 岩波書店, 1976年
- [4] アンドレ・ジイド (1914), 『法王序の抜け穴』(石川淳 訳: 岩波文庫 赤 558-3) 「あとがき」, p.316, 岩波書店, 2020年
- [5] 仲畑貴志 (1980), TOTOウォシュレットの広告

参考文献

Ferdinand de Saussure
Cours de Linguistique Générale, (édition critique préparée par

Tullio de Mauro), Payot, Paris.1975年

ソシュール

『「ソシュール一般言語学講義」校注』, トゥリオ・デ・マウロ校注, 山内貴美夫訳, 而立書房, 1976年

山内貴美夫

『言語学原理』, 而立書房, 1973年

前田英樹

『語る行為とフォルム/ソシュール・ノート (I)』, 『中大仏文研究』, 1976年

Friedrich Ludwig Gottlob Frege

Begriffsschrift, HALLE, A/S

<https://www.mabilia.unesp.br/Home/Instituicao/Docentes/RicardoTassinari/B.pdf>

フレーゲ

『概念記法』(フレーゲ著作集 (1)), 勁草書房, 1999年

Ludwig Wittgenstein

Tractatus Logico-Philosophicus.(First German edition in Annalender Naturphilosophie), 1921

ヴィトゲンシュタイン

『論理哲学論考』(野矢茂樹 訳: 岩波文庫 青 689-1), 岩波書店, 2003年

時枝誠記

『国語学原論—言語過程説の成立とその展開—』, 岩波書店, 1941年

研究報告

「ロジコミ・メソッド」開発経緯と今後の展開について¹⁾

佐藤 友美子

I. はじめに

本稿は、追手門学院大学成熟社会研究所で2020年に開発した「ロジコミ・メソッド」と関連書籍である岩波ジュニア新書「一人で思う、二人で語る、みんなで考える」の、開発経緯と今後の展開について論じるものである。

2014年5月29日設立の追手門学院大学成熟社会研究所のミッションは、学院の教育理念である「独立自強・社会有為」の実現に資する調査・研究・学修支援である。「若者には若者の成熟がある」というスタンスで、学生の気づきや主体的な活動を応援することを主な活動としている。具体的には、学生をターゲットとしたサロン風な講演会であるシェアラボの開催、地域課題解決への学生の参加支援、学生主体でセミナーの企画から運営まで実施するプロジェクトなどである。これらの経験やそこでの問題意識が、「ロジコミ・メソッド」という学生のための論理的思考とコミュニケーションをサポートするメソッドの開発に繋がっている。これまでもそれぞれのテーマについては、その時々状況をレポートの形で報告してきた。

本稿ではこれまでの活動を顧みることで、「ロジコミ・メソッド」は、どういう問題意識で開発が行われ、どんな特徴があり、現在のような形になったかを明らかにする。その上で、開発後に気づいた問題点などを整理し、今後の展開を考えようとするものである。

II. 問題意識の芽生え——「ロジコミ・メソッド」前史

2-1. シェアラボ

研究所の活動として、初期段階から続けてきたのが、シェアラボという公開の研究会である。講師から

の情報提供に対して、前後で学生、教職員、学外の参加者がディスカッションし、その内容を学生が発表する、というスタイルである。テーマは研究所で設定し、第1期は動きのあるものをとすることで動く、学ぶ、商うなど「動詞」をテーマとした。第2期は「ととのえる」というタイトルで体や暮らしというテーマで実施、これらは社会への関心を誘う窓としての一定の役割は果たしていた。しかし、学生は授業外の活動にはあまり関心がないようで、シェアラボを担当していた教員のゼミ学生が主な参加者であり、拡がりはいまも見られなかった。3期目には「とびこめ、未知へ」として、海外経験や仕事など、学生の感性を刺激するテーマとした。第4期は第3期で関心の高かった「私の仕事」という学生にとって、身近なテーマしたところ、参加者は増え、参加者の意見なども、自分事として捉えたものが多くなった。

ここで学んだのは、当然のことではあるが、教員や大人にとって、素晴らしい講師であっても、学生の関心事で無ければ、学生は参加しないし、参加しても思った様な反応は得られない、ということである。

「私の仕事」とした第4期、第5期については、学生にとって気になるテーマであり、講師にとって仕事が多様な意味を持っており、何を目標としているのか等、体験的な話であったこともあり、学生の反応もよく、アンケート結果は満足度が9割を超える結果であった。

2-2. 講座企画プログラム

シェアラボという研究所がお膳立てして講演を聞く、という受け身のプロジェクトから、設立3年目になり、学生自身がセミナーや講座を企画運営する、というプロジェクトを立ち上げた。初年度は授業外のサークル活動として「サバイバルカレッジ『知恵の環』」として取り組んだ。熱心な学生がメンバーを引っ張り、外部講師を招聘して難しい講座をやり遂

げた。しかし、中心的存在だった学生が留学し、このプロジェクトは1年で終わっている。

次は正規授業内で、同様の企画を2年にわたり実施した。1年目は学生の温度差や能力差はあったものの、それぞれ企画した講座を展開し、参加人数が少ないという大きな課題はあったものの、それなりに納得のいく結果を得ることができた。2年目、さらなる進化を狙ったが、途中で意欲を無くす学生も出て、計画した講座は実施できたものの、担当した教職員にとっては課題の多い結果となった。その時の苦い経験がメソッド開発の契機となっている。

(1) サバイバルカレッジ「知恵の環」の取り組み²⁾

一人ひとりが生きる力を育み、自分で判断をする力をつけるために企画したのが、学生が自らの課題の解決を目的とし、学生向けのセミナーを企画運営するという「知恵の環」というプログラムである。

シェアラボに熱心に参加していた4名がコアメンバーとなり、話し合いの結果、テーマは「年金について考える」に決まった。2部構成の講座の企画から、当日の進行・運営までを基本的には学生が担った。講師に関しては、教員が紹介し、繋ぐところは行った。結果としては授業やサークルではできない本物の経験をしたことに対する評価が高く、学生の満足度も高かった。内容や時間配分やチームワークなどに対する反省点はあったが、学生の成長という意味では、濃淡はあるものの様々なことを体験し、ゼロから作り上げたという自信を持つことはできていた。特に積極的に関わったメンバーの成長は著しいものがあった。今後の課題として、一体感を醸成するためには、早い時期にテーマを明確にする必要があることや、温度差の違うメンバーを束ねるチームビルディングのための時間と機会が必要である等の意見が出された。またセミナーに参加した一般学生への事後アンケート結果は、概ね良好であったが、次回以降の参加意欲はテーマによって参加を決める、というものであった。

このプログラムの目的は、講座を計画し、実際に運営するためのプロセスを学生自身が構築することにある。最小限のサポートを、必要とされるときに行う、というスタンスは概ね守ることができたが、外部講師の調整の部分では、依頼文の作成やメールの書き方等、時には踏み込んで指導行っている。対処療法的にこうした指導を行ったが、学生が日常的に目上の人にメールや手紙を書く機会がなく、練習も出来ていないことが分かった。当時はまだラインは一般には使われ

ていなかったが、ラインでほとんどの用事を済ませている今の学生には、特に必要な指導といえるだろう。また、情報収集がインターネット検索に偏っており、一次データにアクセスすることや、関係書籍を読む、新聞等の報道記事を集めることができていないということも課題として残った。

(2) プロジェクト科目<講座企画>の取り組み—第1期

サバイバルカレッジが単位認定のない自主的活動であったことで、ミーティングに集まる時間がとれない等の問題があった。そのことを考え正規の授業として、同様な取り組みを行った。1年間の正規授業にしたことで30回の授業で、学生の自主的な活動の支援を、どのように組立、指導していくか、を実験的に行う場になり、結果には学生、教員双方にとって手応えが感じられる結果となった。

まず、このプログラムは社会に出てから役立つ力をつけることを意識し、テーマや内容は学生が決め、自分たちが決めた目的に向かって主体的に動くことを求めた。講座の実施というところでは、学外の講師や関係者を巻き込むことにより、よりリアルな場となっている。食をテーマに実施することになり、食に対する理解を深めるために食博の見学を用意した。その体験がきっかけとなり、学生の企画による泊りがけの「豊岡市、食と農つながり」ツアー、学祭での学生による味噌玉の実演販売など、座学ではできないことを実施することに繋がっている。

肝心の成果物である講座は、和食店を借り切った和食のマナー講座、添加物に関する勉強会、日本人の体質にあった食事についての講座、原体験と、どの講座も参加人数は定員以下であったが、内容的には教員が期待している以上のものであった。実施までの期間が短く広報活動が上手くいかず、人が集まらないということが現実になっているが、思い通りに行かない経験が学生を成長させたといえるだろう。外部の協力を巻き込んだ企画は、学生にとっては、ハードルは相当に高い。その分、本気度は上がり、結果に対する責任を感じるということもあり、現実の社会を体験して欲しい、という講座の趣旨に合致したものとなっている。

教えるから学ぶに転換し、それをグループで行うことで、新たな問題も生まれている。チームワークの形成が難しかったという学生からの指摘があったが、はじめての授業で、また正規授業ということで、詰め込みすぎて遊びが少なかったことが、原因でもあったよ

うに思う。学生の主体性をどう導くか、導入のプログラム、チームビルディングのためのプロセスの開発など、課題が明らかになった。

ワークシートを使い、全体像の把握や、アイデア膨らませるなど、新たな試みを行ったが、学生による評価は必ずしも高くなかった。ワークシートの意味や役割についての理解を促す必要性があったこと等、今後の課題となった。論理的思考力を支援するためにツールの紹介も行ったが、自らの課題の解決に能動的に使っていくところまでは残念ながら行かなかった。提示→練習問題→実践といった流れを作るプログラムの必要性が浮かび上がった。

(3)プロジェクト科目<講座企画>の取り組み—第2期

2018年度も正規授業として学生に身近な食をテーマに「外部との連携協力を元に、食に関する若者向けの講座を開催すること」を目標として授業を実施した。昨年とほぼ変わらない体制で対応したが、前期で履修放棄する学生が出るなど、前途多難なスタートとなった。

チームビルディングを意識し、民族学博物館に行き、世界の料理について調べ、学生が選んだテーマで調理実習を行う機会を授業時間外に設けた。4つのグループは子ども向けの講座、食品ロスの勉強会、魔法のスープの紹介、サルベージパーティーを実際に行うなど、多岐にわたり、すべてのチームが講座を実施した。しかし、学生の力不足を事前の活動では見抜けず、教員のサポートなしには進まないチームもあり、最後まで苦労の連続となった。主体性を重んじるプログラムのリスクを知ることになった。

場面場面では学生は熱心に取り組み、楽しんでいる様子もあり、振り返りのレポートでは、達成感や自身の課題にたいする認識が述べられている等、一定の成果は感じられた。一方で、担当した教職員は前年の反省が十分に活かされず、前回以上にチーム作りのむずかしさを感じ、徒労感を感じることも多かった。このプロジェクトの狙いである論理的思考力を支援するツールについては、授業の場面だけ使われており、汎用的なものとは意識されていない、という結果であった。また、グループワークにおけるチームワークについての、課題も残った。

(4)3回のプロジェクトの振り返りから

2015年のトライアルから始まり、正規授業の一環として行われた2017年と2018年の学生が自ら講座を

企画、運営するという取組は、多くの示唆を関わった教職員に与えてくれるものとなった。教員が複数で対応する手厚い授業であっても、マニュアル通りには行かないということを痛感した。スタートから講座終了までのプロセスで今後の課題となった点を列挙しておく。

- ① 最初のところで目的や目標の共有化
- ② 学生同志のチームビルディングのための活動
- ③ 提案や活動に学生ならではの視点や工夫
- ④ テーマ設定時に授業の趣旨、顧客ニーズと合っているかの検証
- ⑤ スタートから最終実施日までのスケジュール管理が必要という意識の醸成
- ⑥ 外部講師や関係部門との基本的な調整スキルの教育
- ⑦ 人に伝え、参加してもらう為にやるべきこと、例えばチラシに盛り込む内容の確認
- ⑧ 当日の段取りと適材適所の担当者の決定
- ⑨ 講師と参加者に楽しんでもらう進行やホスピタリティ
- ⑩ 終了後の後片付け、お礼、振り返りまでのフロー

決定までのプロセスで、人に伝えるための論理的思考力やコミュニケーション力はもちろん必要であるが、実際の運用に際しては、経験や想像力が必要とされており、学びというよりは、経験がものをいう場面も多い。

今回のような特別のプログラムで一回実施して、身に付くようなものではないのは明らかなので、授業内のPBLやアクティブ・ラーニングにおいて、繰り返し行うことで、身に付けていくことが望まれる。そのためには、大学在学中に様々な授業や課外活動など、経験できる機会を増やすことが必要であるとの結論を得た。

Ⅲ. 「ロジコミ・メソッド」の開発の取組²⁾

数年間のプロジェクトの経験や、授業改善の試みの中から、汎用的な論理的思考力とコミュニケーションに資する副読本の必要性を感じ、成熟社会研究所として開発を考えることになり、2018年3月に開始した。研究所以外のメンバーの参加も得、構想から試用版が完成するまで1年半、第1版ができるまでには2年を要し、42回のミーティングが行われた。

メソッドの内容は岩波ジュニア新書を参照していた
 だくことにして、本稿では、「ロジコミ・メソッド」
 の特徴となっている点を3点、上げておきたい。

3-1. ツールからシーンへ、そしてメソッドへ

スタート時には、ワークショップなどを行った時にア
 イデアを広げ、整理するためのKJ法やマインドマッ
 プ、人に提案を説明するのに必要なベン図や5W1H、
 分析や提案のための技術やツールの提供を考えてい
 った。しかし、議論を始めると、実際の場面で、学生が
 与えられた課題に対して、何を問題だと思ひ、どう解
 決の糸口を見つけていくかの過程には段階があり、ス
 テップ毎に抑えなければならないということになっ
 た。また技術やツールの提供だけでは実際に使う場面
 が想定できず、活用できないのではないか。インター
 ネットで調べられるツールの紹介は、多くはビジネス
 向けで学生使い勝手が悪い、等が問題としてあげられ
 た。そのため具体的なシーンを意識した事例も入れ込
 むことになり、最初の想定より、情報量が増えていっ
 た。

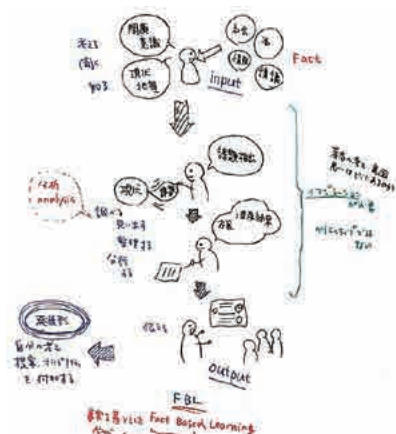


図1 第4回打合せ記録グラフィック
 (インプットからアウトプットの流れ)

ツールの紹介本ではなく、フローや使い方を提案し
 ながら、かつマニュアルのような指示書ではなく、自
 分で考えるものにするにはどうすれば良いか。行きつ
 戻りつ議論の中で、少しずつ固まり、最初のところ
 で学生が自分なりの思いを持つことを、大事にしたい
 ということ意見が一致した。

アクティブ・ラーニングの冊子であるが、第一章の
 「グループワークを楽しむ」に、「ひとりで思う」とい
 う自分を意識するページを挿入した。自分の思いが無
 くして、人と対話することはできない、という気持ち
 を込めている。

一章毎に何を伝えたいか、どこに注意して欲しいか、
 という思いを書き込むことになり、ツール紹介だけで
 は語りきれない様々な要素が詰まったものとなった。



図2 第14回打合せ記録グラフィック
 (全体像がみえてきた段階)

冊子のキャッチコピーは「チエはつくもの、コツは
 つかむもの、センスは磨くもの」。構成はMAP (章の
 全体像の把握)、TEXT (解説)、TECHNIQUE (コツ、
 ヒントの提示) のどちらも記憶に残りやすい三段階で
 展開し、メソッドとしての統一性を持たせるものとな
 った。使い方としては、必ずしも順番に使うことを
 想定してはいないが、思考のプロセスを意識した並び
 となっている。

2年間にわたるツールから、シーン、そしてメソッ
 ドになるまでの開発の時間は、忙しい授業の合間の
 短い時間の積み重ねであったが、メンバーにとっては
 豊かで、楽しい時間であった。意図したわけではない
 が、結果的にアクティブ・ラーニング、グループワ
 ークの可能性を実感することができた。このような素晴
 らしい時間や体験を、アクティブ・ラーニングに取り
 組む学生に、少しでも味わってほしいとの思いが詰
 まったものになっている。

3-2. 学生の意見を取り入れる

そもそも「ロジコミ・メソッド」の開発の動機はア
 クティブ・ラーニングが思ったように進まない、教員
 の言葉が学生には届いていない、学生の考えが深まら
 ず、一般論で終わってしまう等、忸怩たる思いから来
 ている。これが必ずしも学力の問題でないことは、講
 義型の授業で優秀な学生がアクティブ・ラーニングを
 好んでおらず、発想が広がらず苦慮していることを考
 えれば明らかである。

グループによるアクティブ・ラーニングでは、知識
 を理解し覚えるのではなく、人と力を合わせることで
 新しいものが生まれる醍醐味を知ること大きな意味

がある。

アクティブ・ラーニングのプロセスを一つずつ分解し、学生の反応を思い出し、なぜ伝わらないのか、上手くないかなかったか、何が足りないのか、を議論した。難しい言葉を使わず、どうしても使う場合は簡単な解説を入れるなどの工夫もした。ほぼ全体が固まった段階で、初心に帰って学生のアクティブ・ラーニングに対する意見を聞こう、ということになり、夏休みの一日を使って、「アクティブ・ラーニング実践に向けての課題を考えるワークショップ」を9名3学部の学生に集まってもらい行った。

ワークショップでは、「私の取説」でチェックインした後、「アクティブ・ラーニングの体験」についてのグループワーク、「理想のアクティブ・ラーニングを考える」というテーマでのワーキング、アクティブ・ラーニングにおける自分の役割などについて話し合いが持たれた。

教員の感じている学生のアクティブ・ラーニングに対する気持ちと実際の学生の意識のギャップや、ツールを使うことの難しさ、評価に対して教員が思っている以上に敏感であることなど、が明らかになった。

ワーキングで得た情報は「ロジコミ・メソッド」に、直接に反映させた。グループワークのメンバー構成、役割や、進め方のフローについての意見などである。出来るだけ忠実に「学生の声」として挿入し、身近に感じてもらえる工夫をした。また、目標の検証が中間でも必要だという意見、軸などのツールの使い方の丁寧な説明が欲しい等はメソッドに反映することにした。

後日、ワーキングに参加した学生三人には、試用版の「ロジコミ・メソッド」についてのヒアリングを行った。出た主な意見は以下のとおりである。

- ・そもそもなぜアクティブ・ラーニングが必要なのかがわからない
- ・取り扱い説明のようなものが必要なのではないか
- ・ツールの意味や背景がわからないまま言われた通り使っているので、次に繋がらない
- ・体験したことを「上書き」「定着」させる仕組みが必要
- ・自己肯定感を高めていく工夫が必要
- ・実践をしたことが無い人には、ニーズがないのではないかな 等である。

以上を含む率直な意見が出て、試用版から改訂する

時の参考にするとともに、書籍化の必要性も感じるところになった。人数が少なく、定性的なデータであるが、メソッドの対象者である学生の参加を得て、生の意見を聞くことができたことは、教員の気づきとなって、メソッドを使いやすいものにするには不可欠なプロセスであった。

上から目線で教員が自分たちの思いだけで作ったものとは一線を画することができているとすれば、ワークショップやヒアリングに参加してくれた学生の意見によるところが大きい。「ロジコミ・メソッド」の開発においては、教員・職員・学生のそれぞれが得意分野で参加し、その持ち味を十分に発揮した意味は大きいといえるだろう。

3.3. 手に取りやすく、訴えかける力を重視

「ロジコミ・メソッド」にはお手本にした冊子がある。「ワークショップ」(岩波新書)等の著書のある中野民夫氏³⁾の参加型授業のために冊子「『教える』より『学び合う』場を創ろう!」である。アクティブ・ラーニングで行われるワーク・ショップを活発化するためには、講義型の授業とは違う様々な注意点がある。20ページにも満たないその冊子には大教室での参加型授業の実践から時間や場の使い方、進め方のヒントが詰まっている。形のイメージは最初から中野氏の冊子のような、大きさ、薄さと決まっていた。内容の表現についても、どのページにもイラストが入っており、文字は少な目で、短い文章に小見出しが付いており、参考になるところが多かった。

大学生向けの勉強の仕方の入門書はかなりの数が出版されている。学習技術研究会編著「知へのステップ」(くろしお出版)のように、版を重ねているものも少なくないが、基本的は文字で構成されている。大学生に学び方を教えるものであるから、文字を読むことが基本、という姿勢は当然のことであろう。そのことを理解しつつ、あえて文字とビジュアルをセットにすることで、苦手意識なく、学生に使ってもらえるようにすることを狙い、わかりやすい表現にこだわった。センテンスの中身についても、文字を少なく、細かく分けて、一つ一つの文章が頭に入りやすくする工夫をした。文字の部分をイラストで表現し、吹き出しの文字を入れることで具体的な情景がわかるようにする等の工夫にも特徴がある。

文字とイラストは別のものなので、文章が出来上がって、そこからイラストを作り・編集する人の出番となるのが一般的な進め方であるが、今回のチームに

は、ファシリテーショングラフィックを得意とするメンバー（中川）がいた。記録と、イラスト、ページレイアウトのすべてを担当し、文章に合わせてイラストを書き、言葉も入れ、編集するという神業で、今の読みやすい形となった。一つの仕事として内部で完結するという創造的な仕事となったことを書き留めておきたい。⁴⁾

メソッド作成の議事録もすべてにグラフィックコーディングで作成され、論点やキーワードが浮かび上がり、頭の整理と情報の共有化がスムーズに行われた。内容を文字にするだけでなく、関係性や流れ、重要度などを視覚化することで、創り上げる過程そのものが可視化されたものである。その精神がメソッドにも生きている。

期せずしてクリエイティブ・ラーニングを提唱している慶應義塾大学 SFC 井庭研究室で作成された「対話のことは：オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得」（丸善出版）「旅のことは：認知症とともによりよく生きるためのヒント」（丸善出版）も、同じように作られている、ということを知り、書籍の新しい作り方との思いを持ったことを記しておきたい。

IV. 岩波ジュニア新書が出来るまで

冊子は最小限の説明や内容に絞り込んだ結果、持ちやすく、見やすいものになったが、メソッドだけでは解決できない問題もあった。学生へのヒアリングで明らかになった、アクティブ・ラーニングに対する理解や、ツールの意味を知らなければ、その場限りになってしまう等の意見である。もっと根本的な、どんな使い方をすれば良いのかわからない、という意見もでていた。そのため、次のステップとして考えたのが、ある程度の内容を盛り込める書籍にすることであった。高校生、大学生、その教師・教員に読んで欲しいという思いから、若い世代と教員によく読まれている岩波ジュニア新書としてコロナ禍の2020年7月に出版の運びとなった。

「ロジコミ・メソッド」にプラスして、アクティブ・ラーニングの必要性を学生が理解し、取り組みを行うための啓蒙的内容を説教臭くなるのを承知で入れることにした。また学生との距離をグッと縮める役割を果たす取扱説明書を読者と等身大の若者を登場させ、どんな場面で効力を発揮するかを読み物として紹介している。学び合いは学校だけでなく様々に行われている。テーマや場に相応しい形で世代を超えて

行われていることを、海外の事例も入れて紹介した。グループワークのコツのコツ、学生が求めていた思考ツールの意味をビジュアル事例と共に掲載した。岩波ジュニア新書「一人で思う、二人で語る、みんなで考える」は学生の意見を最大限取り入れた完結編となっている。

詰め込み過ぎという反省もあるが、学生だけではなく、教員にとっても授業のヒントとして、使えるものを目指した結果である。

V. 残された課題

メソッドの冊子も本も出来上がった。しかし、これはスタートに過ぎない。形は出来ても、使われ、役に立たなければ意味はない。100名の担当教科履修の一般学生にコロナ禍オンデマンド授業で使用し、高い評価を得られたが、汎用的なものとして本当に役にたっているかを検証するのはこれからである。積み残した課題について述べておきたい。

5-1. 評価について⁵⁾

成熟社会研究所紀要4号「アクティブラーニングとその評価に関する考察から」ではこれまで行われている評価に対する研究成果を検証し、アクティブ・ラーニングの評価の難しさを確認した。

個別に行われているアクティブ・ラーニングでは、評価の基準、枠組に定まったものが有るわけではなく、個々の教員の考え方に任されている。アクティブ・ラーニングに特化した授業では純粋にアクティブ・ラーニングの成果を問うことができるが、教科科目で手法としてアクティブ・ラーニングを使った場合の評価の問題は大きな課題である。アクティブ・ラーニングによって解決すべき課題はグループワークの質や知識の習得それぞれを評価することに意味があるのか、トータルで評価するというようなことができるのか、などあまりにも多様である。

アクティブ・ラーニングはプロセスに意味がある。しかしそのプロセスを共有するメンバーは学生が望む通りになるわけではない。チームは偶発的なものであるにも関わらず、成果に大きく影響を与える。成績の良い学生が忌避するのは偶然性に左右される評価を嫌うという面があることも否めない。

特に教科内で実施するアクティブ・ラーニングは、アクティブ・ラーニングの成功が必要とされてきた知識を保証するものではないことも生じる。チームで盛

り上がり、反応もすこぶる良かった授業で、最後のレポートが散々な結果ということもある。学ぶ姿勢が醸成されたのだから、知識は自分で学ぶ気になった時に学べば良い、と割り切ることも可能である。しかし、現状の評価システムの中で学生の納得性という意味では難しい面もある。

教科で行うアクティブ・ラーニングは、プロセスの評価と結果に関する評価の2本立てとする。自己評価と他者評価を組み合わせる等、学生自身の参加も得て、納得性の高い評価の方法を模索していく必要があるだろう。「ロジコミ・メソッド」の効果検証と並行して、到達目標の設定と納得性の高い評価は表裏の関係にあり、次年度の授業実践の中で、取り組む予定である。

5-2. 学び合う場の必要性

教員は一人親方のような存在であり、学生に対しては強い立場にある。一方通行の授業は学生には不評でも、そう簡単には変わらない。渡部淳「アクティブ・ラーニングとは何か」岩波新書⁶⁾では、日本の授業スタイルを「チョーク & トーク」という言葉で象徴的に説明している。最近の大学教育ではチョークがパワーポイントに変わっているが、内実は大きくは変わっていないだろう。また、「これから取り組もうとしているのは、長いあいだ教授定型になってきた知識注入型の授業スタイルといういわば大きな岩を動かす仕事であって、道具もなしにそれに立ち向かうのはいささか乱暴に過ぎる。とりわけ、学びのプロセスをデザインし、効果的に運用できるように、教師側および生徒側の条件を整える必要がある。条件整備を怠ったまま、結果だけを求めるのは、道具（ツール）もなしに素手で大きな岩を動かせというに等しい。その重要なツールであるアクティビティ（学習技法）こそ、アクティブ・ラーニングの導入に決定的に重要である」と述べている。

学び方が変われば、教え方も当然変わるはずである。しかし、大学には義務教育で用意されているような指導要領はなく、教員同志の普通の会話に、教育の話はほとんど話題にならない。筆者は企業出身であり、実務家教員なので、自分の教育の対象である学生への関心は一般教員より相当高いが、メソッドを開発するまで、話し合う場はほとんどなかった。

アクティブ・ラーニングでは、学生の主体的、能動的な取り組みが不可欠である。思うように動機づけができず、芳しくない結果に終わることも多い。アクティブ・ラーニングが必要だと思っても、実行するた

めの講義法という確立されたものが有るわけではなく、アクティブ・ラーニングの進め方は各自のやり方に委ねられ、学ぶ機会はないに等しい。

立命館アジア太平洋大学（APU）の出口治明学長⁷⁾はインタビューに「考える力をさらに養おうと思ったら、仲間（ピア）同士が互いの力を発揮し協力し合っで学ぶ『ピアラーニング』が有効です。これまでは先生が一方的に知識を与える授業形態がほとんどでしたが、学生が主体的に学びたいと思わなければ、何を教えても身につけません。ですから、学生が小グループで協働しながら、先生は学生の自発的な学びを支援することが重要です。学生の学びを先生がサポートするこの手法は、『ミネソタメソッド』と呼ばれ、APUでは約30%の先生方がこれを学んでいます」と答えている。立命館アジア太平洋大学のような積極的な試みを実施している大学は多くはないだろう。

アクティブ・ラーニングは数回のFD研修会などで話を聞く位で容易にできるものではない。教員同志のピアサポートの仕組みや、悩みや成功体験・失敗体験を自由に語る場である教員サロンのような場が望まれる。しかし、現実には教員が揃う場面は教授会などの公式の場がほとんどで、差し迫ったテーマに追われ、自由な討議がおこなわれることはほとんどない。

一方で、問題意識を持った個人の集まりであるサロンという形もある。元追手門学院大学の池田輝政氏はその効用を「アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ—大学教育を変える教育サロンの挑戦」⁸⁾に、学生の学びを変えるためには、教員の意識や実践を変えることの大切さ、共に語るにより教員も成長する事例をまとめている。

大学教員は研究者であるだけでなく、教育者である。研究者として切磋琢磨する機会になるのが学会であるとすれば、教育者としての成長を促す機会があってもよいはずだが、その必要性に気づいている人は少ないのではないだろうか。

強制されるものではなく、一カ月に一回位の頻度で、昼休みの時間に集まるなど、気楽な雰囲気の中で、授業での悩みや成功体験を、自由に語る会う場があれば、悩みの共有化され、学生にとっても良い結果になることが期待される。現在はコロナ禍で対面は難しいが、むしろ一大学内部に限らずに、オンラインでの実施を考えるなど現実的な方法を模索することも可能であろう。教えるから、学生自らが学ぶ、に変えていくためには、教員の意識改革や学び方の技術の習得が今後の課題であろう。

5-3. 深く考え、学び続ける

アクティブ・ラーニングの目的はグループワークが上手くできる、ということではない。グループである以前に、一人ひとりが、どれだけ自分の頭で考え、情報をキャッチし、世の中の動きや人の思いに想像力を働かせることができるかが、問われている。わかったつもりで思考停止をせず、感受性豊かに考えることなくして、論理的思考もコミュニケーションもありはしない。それを教える、ということが可能なのか。大きな課題である。

成績もよく、真面目に努力しているが、目標が定まらず、夢見がちな学生もいる。むしろ、優秀な学生と言われる学生がこれまでの能動的学修法での成功体験から抜け出せず、表面的な学修に終わっており、学びのきっかけや、教員の力を必要としているのかもしれない。一方で独特の世界観を持ち、そのことについて説得力を持って語れる魅力的な学生に出会うことがある。彼らは自分の足でしっかりと立っており、変化する社会にも十分適応できる能力を持っている。教える前に、基本のところは既にできている。彼らがなぜ、そうなったのか。家庭環境なのか、後天的なものなのかの考察も必要であろう。

卒業してからも、将来に通用する学び方を学生が身に付けることの必要性は多くの教員が気づいている。インストラクショナルデザインという「学び方」を教える手法も開発され、教員だけでなく学生向けの書籍も出版されている。「学習設計マニュアル 『おとな』になるためのインストラクショナルデザイン」⁹⁾のように、学び方を身に付けるための自己調整学習を組み入れた統合的なプログラムを実行することで、社会にでてからも、目の前の課題に主体的に関わり、学び、成果をあげることを意図した本も出版されている。しかし、多くの学生は学び方を自分ものにせず学校を巣立っていく。すこしでも多くの学生が、学びのきっかけを見つけ、学ぶ楽しさを自分のものにして社会にでていくことを実現するのが教員の仕事である。

基本に戻って、結果を急ぎ過ぎず、学生の思考速度に合わせて、学生の学びに伴走し、学ぶことの面白さにめざめ、もっと知りたい、これは使える、という気持ちを感じるように持っていく。知りたいから学び、面白いから考える、情報を集める。その基本のところを忘れずに、「ロジコミ・メソッド」の使い方を考えていきたい。

VI. 終わりに

本稿は、「ロジコミ・メソッド」の開発経緯と残された課題について整理し、今後の方向性を明らかにしようとするものである。学生の学びをサポートするための「ロジコミ・メソッド」と「一人で思う、二人で語る、みんなで考える」(岩波ジュニア新書)は完成したが、そもそもの課題を解決するには、まだなすべきことが多いということが明らかになった。

「ロジコミ・メソッド」のツールを使えば、論理的な思考をサポートできることは、授業実践の中で感じることができる。しかし、V. の「残された課題」でも述べているように、「主体的で、対話的な、深い学び」という本来の目的である肝心なところに働きかけるのは容易なことではなく、成功しているとは言い難い。ツールを使いこなして、形はできたとしても、自分の頭で考え、人と対話する中で、更に磨き、人間的に伝える、というプロセスが身に付かなければ、効果は十分とはいえない。そのためには、学生の主体性が不可欠であることを理解した上で、自分で考え、その考えを人と共有化するためのコツを掴むための「ロジコミ・メソッド」を活用し、授業プログラムの開発が今後の課題であるという認識に至った。

一方で、「ロジコミ・メソッド」は自分で考える力、コツを見つけ出す醍醐味を奪ってしまうのではないかと、という懸念もある。しかし、クリエイティブは模倣から始まるという言葉もある。誰にでも数学の公式が生み出せるわけではない、過保護になってはいけませんが、むしろ先人がやったことを真似してみても、失敗や成功体験を積みかさねることが、学ぶことに繋がるのではないかと信じることにする。

「ロジコミ・メソッド」は、アクティブ・ラーニングなどで主体的に学ぶ場で、汎用的な力を発揮することを意識して作ったが、まだ発展途上で、効果の検証もできていない。これからも、地道に学生や教員の意見を聞き、学ぶための副読本、教えるための道具箱として活用されることを願いつつ、より実践的なメソッドとして磨き上げ、活用しやすい形に進化させたい。

注

- 1) 本稿は、追手門学院大学成熟社会研究所紀要、第1号、第2号、第3号、第4号の研究レポート、プロジェクトレポートの内容に加筆、修正を加えたものである。
- 2) スタート時から完成までのプロセスは成熟社会研究所紀要4号「グラフィックレコーディングから辿るロジコミメソッド開発編集の過程」に詳しい。メンバーの中川によって作成され42回の会議録はA4一枚×42枚をみることで、思考のプロセスを読み取ることができる。またメソッドの文言やビジュアルの修正も平行して行い、内容も同時並行的にできあがっていった。
- 3) 中野民夫氏は博報堂から同志社大学教授、現在は東京工業大学教授。ワークショップやファシリテーションの専門家である。
- 4) 慶應義塾大学 SFC 井庭崇氏は創造的学び（クリエイティブ・ラーニング）を提唱し、そのためのツールとしてパターン・ランゲージを作成している。研究室で作成された「対話のことは：オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得」（丸善出版）はイラストや本文のレイアウトまで井庭氏自身が行っている。「旅のことは：認知症とともによりよく生きるためのヒント」（丸善出版）は学生とイラストを書き、表紙も学生がデザインし、印刷以外のすべてを自前で作っている。（井庭氏が社長を務める株式会社クリエイティブシフトの対談より、<https://creativeshift.co.jp/interview/1560/>）
- 5) 成熟社会研究所紀要4号「アクティブラーニングとその評価に関する考察から」では、京都産業大学の全学的な取り組みにおける評価の問題を取り上げている。
- 6) 「アクティブ・ラーニングとは何か」岩波新書、2020年がある渡部淳は「獲得型教育研究会」という小学校から大学教員までを対象とした学びのグループを運営し、情報交換や学びのプログラム開発を積極的に行ってきた。2020年新書の出版日の前日に急逝。研究会はその後も遺志をついで活動している。
- 7) 立命館アジア太平洋大学の出口治明学長はライフネット生命の創業者、2018年から学長。歴史「『教える』ということ 日本を救う、『尖った人』を増やすには」2020年角川書店などがある。引用は一般財団法人「国際ビジネスコミュニケーション協会」Featuer 特集「大学におけるグローバル人材育成」インタビュー、「個性を伸ばす教育を実践するため」から。https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter/nl137_feature_01.html
- 8) 池田輝政・松本浩司編「アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ—大学教育を変える教育サロンの挑戦」ナカニシヤ出版2016年には、授業改革・教育改革に取りくむ大学級職員が、学生の学びと関わることの喜び、授業改善の取り組みなどを自由に語り合う場もたらした教職員の変化とこれからの教育サロンを展望している。
- 9) 「学習設計マニュアル 『おとな』になるためのインストラクショナルデザイン」鈴木克明・美馬のゆり編著 北大路書房 2018年では、学び方を身に付けるためのプログラムが発達段階の過程に合わせて詳細に紹介されており、具体例や練習問題も掲載されている。順を追って

学べば、一人でも学び方を習得できるマニュアルになっている。インストラクショナルデザインはアメリカで1980年代、学生の質の低下が問題視され、その対応策として自分自身を見つめ、自分を育てることの必要性から生まれた「自己調整学習者」から始まっている。社会人の研修にも良く使われており、「インストラクショナルデザインの道具箱101」鈴木克監修、市川尚・根本淳子編著 北大路書房のように経験と勘で行われていた教育に学問的に裏付けのされたインストラクショナルデザインを取り入れることを推奨している。

ロジコミ・メソッドの活用事例

——2020年度の講義での実践を通じて——

今堀 洋子

I. はじめに

2019年の秋に冊子化されたロジコミ・メソッドであるが、それ以来、担当している講義の色々な場面で活用してきた。2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、追手門学院大学も、春から講義は、全面的にオンラインとなったが、その中でも、筆者は、ロジコミ・メソッドも盛り込みながら、アクティブ・ラーニングを実践してきた。本研究ノートでは、2020年度の講義における、ロジコミ・メソッドの活用事例について紹介する。

II. ロジコミ・メソッド

ロジコミ・メソッド(図1)は、アクティブ・ラーニングを進めていく中で、必要となる「人に伝えるためのツールとコツ集めた、ロジカルコミュニケーションのためのメソッド」である¹⁾。成熟社会研究所で、数年にわたりチームで対話を重ねてきた結果、形になったものである。



図1 ロジコミ・メソッドの表紙

ロジコミ・メソッドは、図2に示す通り、第1章は、「グループワークを楽しむ」、第2章は「世界を拡げる」、第3章は「伝えて共鳴する」と、3部構成になっている。またそれぞれの章も3段階方式になっている。

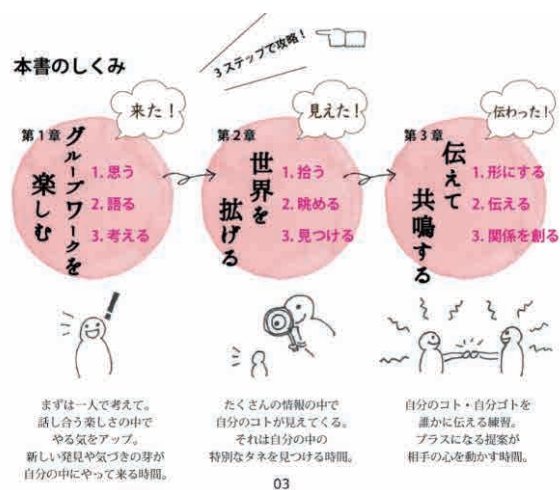


図2 ロジコミ・メソッドの構成

特質すべきなのは制作段階で、学生の意見を取り入れた点である。2019年の夏に、学生有志が集ってもらいワークショップを開催した。その際に出た意見として、グループにおける「私の役割ってなんだろう？」(冊子の16頁)や、「グループワークは友達同士がいい？」(冊子16頁)といったように、学生達がグループで話し合った結果が、コラムとして掲載されている。また、「学生が考えたアクティブ・ラーニングフロー」(冊子33頁)も、当日のワークショップで二つの班に分かれて話し合われた内容である。更には、学生達としてアクティブ・ラーニングの評価が気になるという意見が多数寄せられたのを踏まえて、冊子の最後に、「アクティブ・ラーニングの評価とは？」(冊子46頁)を追加することにした。

Ⅲ. 2020年度の講義でのロジコミ・メソッド活用の実践例

3-1. 講義全体での実践概要

2020年度に担当した講義12科目全てにおいて、ロジコミ・メソッドを活用した。表1に、それらがどんなメソッドであったのかを示した。全体でみると、「グループワークを楽しむ(第1章)」のメソッドが多かった。中でも、「質問をしてみる」、「インタビュー」は、多くの講義で取り入れた。講義にゲストスピーカーをお呼びした際に、学生達が事前に質問を考えるということと、ゲストに有志の学生がインタビューをするという形で実践した。一方、「世界を拓げる(第2章)」のメソッドは、あまり活用できなかった。「情報を眺める」際に使えるメソッドとして紹介されているマインドマップとマンダラートは、それぞれ一つの講義で活用してみたが、ブレインストーミング、KJ法、マトリックスなどは、その機会がなかった。また、「伝えて共鳴する(第3章)」では、グループや個人での発表に先立ち、「プレゼンテーションの基本」を講義に盛り込んだ。見開きで、簡潔にまとめているため、プレゼン資料を作る際にも、実際に発表する時にも役立つという学生からのコメントも多かった。

表1 2020年度の講義で実践したロジコミ・メソッド一覧

春/秋	科目	受講者数	ロジコミ・メソッド									
			全体	第1章			第2章		第3章			
			気にな る箇所	トリ セツ	他已 紹介	質問	インタ ビュー	リレ ー式 スピー チ	マイン ドマッ プ	マンダ ラート	プレゼ ンの基 本	論文 の書 き方
春	環境の科学A	130									○	
	環境の科学B	130									○	
	環境経営論	60				○						
	新入生演習	20		○	○	○						○
	入門ゼミ1	20		○	○	○						
秋	基礎ゼミ2	17		○	○	○						
	地域と暮らし1	180									○	
	地域づくりと環境	180				○	○				○	
	地球環境論	30				○	○		○			
	NPO論	60				○	○				○	
	入門ゼミ2	20				○	○					
基礎ゼミ2	17	○			○	○	○		○		○	

3-2. ロジコミ・メソッドで気になった箇所は？

秋学期の基礎ゼミ2において、「ロジコミ・メソッドを読んで、気になったページ、なぜ気になったかなど教えてください。」という問いかけをしてみた。結果は、図3の通りとなった。当日は、マンダラートを使い、それぞれ自分が好きなことについて8つ書き出

した上で、2~3人のグループで、自分のマンダラートを見せながら、対話をするということを試みたので、それについて言及している学生が多かった。実際に、マンダラートが、アイデア出しの時に活用できると気づいたり、人により興味関心が異なるということを新鮮に感じた学生もいた。その他にも、「未知なる世界との遭遇」のページにワクワクを感じたという意見もあった。

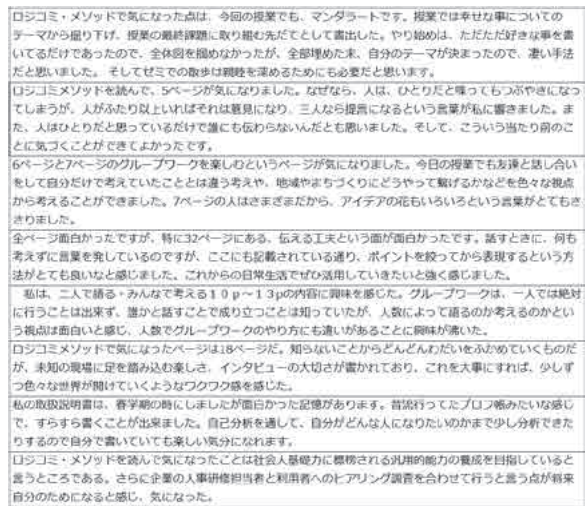


図3 ロジコミ・メソッド気になった箇所は？

3-3. 論文やレポートのテーマ決めと執筆プロセスのやりとり

春学期の新入生演習、秋学期の基礎ゼミ2において、最終課題として、各自テーマを定めてのレポート(1500字)およびミニ論文(5000字)を課した。その際、いきなり文章を書き出すのではなく、テーマを決め、アウトラインを熟考することから始めてもらった。そのため、講義を3~4回利用して、執筆の進捗状況を披露してもらったり、グループに分かれてお互いアドバイスをしあったり、画面越しに、全体に対して、途中の段階のものを音読してもらうなども試みた。

各自、テーマを決めてもらう際には、マンダラートを、そして、アウトラインに関しては、「レポート、論文の書き方」(図4、図5)を示し、それに沿った形で取り組んでもらった。



図4 レポート、論文の書き方①

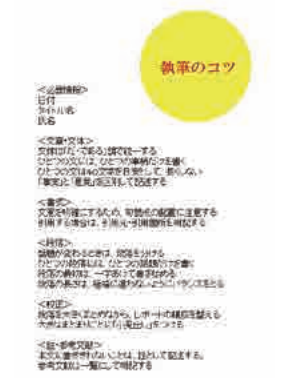


図5 レポート、論文の書き方②

図6に新入生演習の振り返りコメントを示す。これは、既に各自が考えたアウトラインを元に、最終課題のレポートを書き進めている途中段階のものを、オンラインの画面で共有して、順番に見ていきながら、アドバイスをした回のものである。学生のコメントからは、書き進めていくうちにアウトラインがそもそもそれで良かったのかと疑問に感じ、もう一度見直しを始めている様子や、アウトラインの重要性に気づいたというコメントや、他の人のアドバイスも自分に照らし合わせて吸収しようとする姿勢などが見て取れた。

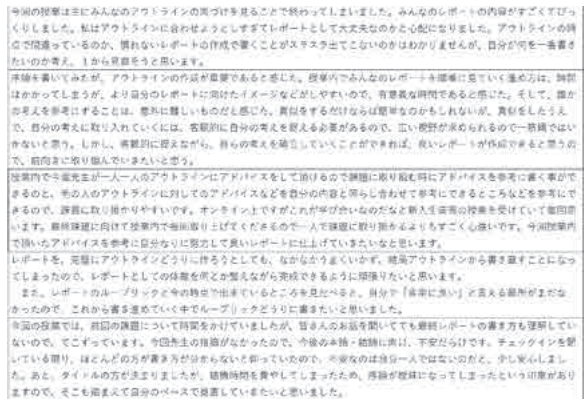


図6 新入生演習の振り返りコメント

3-4. トリセツ・リレーインタビュー

春学期は、ゼミや新入生演習など少人数クラスもオンラインであったため、通常、初回のオリエンテーション時に行うクラスの仲間を知るための交流にも工夫をこらし「トリセツ・リレーインタビュー」を実施した。

具体的には、ロジコミ・メソッドの中にある「わたりのトリセツ」を使い、パワーポイントで作成されたひな形に、必要な項目を入力する形で、各自作成してもらった(図7・図8)。

わたしのトリセツ(取扱説明書)①

1. 「わたし」=【名前】の商品説明

3. 取り扱い注意!

4. 上手なお手入れ(いつも「元気」でいるためのメンテナンス)

症状	考えられる原因	対処・応答
喋らなくなる	自信を失っている	相談に乗る

★定期的なお手入れ方法(上記のようにならないために気をつけてほしいこと)
→失敗してもあまり責めない!

図7 わたしのトリセツの事例1

わたしのトリセツ(取扱説明書)②

1. 「わたし」=【名前】の商品説明

3. 取り扱い注意!

4. 上手なお手入れ(いつも「元気」でいるためのメンテナンス)

症状	考えられる原因	対処・応答
行動が減ります	定期的に来る自信が減ります	話を聞いてあげてください

★定期的なお手入れ方法(上記のようにならないために気をつけてほしいこと)
→気難しい性格と取られがちですが、基本的には優しいです。気持ちよく話しかけてください。👍

図8 わたしのトリセツの事例2

提出された各自のトリセツを一つにまとめ、通し番号をつけ、①番の人から順番に、画面に共有し、次(②番)の人が、①番の人のトリセツの内容を見て、気になることを3つ以上インタビューする形で進行していった。①番の人が終わったら、②番の人が③番の人にインタビューを受けるという形で、教員も含めて、リレーインタビューを続けた。尚、1回の講義で全員分を行うのは、時間的にも難しかったので、「み

んなのトリセツ」というコーナーを設け、毎回の講義の最後に、3～4人ずつ実施するという形をとった

トリセツ・リレーインタビューを、春学期は、二つのゼミと新入生演習で実施したが、どのクラスでも、とても好評であった。以下、振り返りコメントから学生の意見を抜粋する。

- 「わたしのトリセツ」は、クラスの仲間それぞれの得意なことや、どんな人なのかを簡潔に知ることができ、今後どう付き合っていけばいいのかが分かったので、とても良いアイデアだと思いました。また、クラスの皆の「わたしのトリセツ」を読んで、このクラスには個性的な人や面白そうな人がたくさんいることが分かったので、対面授業がますます楽しみになりました。
- みんなのトリセツが読んで面白かったです。自分がインタビューされると今から緊張します。
- 今日の私のトリセツでのインタビューが思ったより楽しそうだったので、事前に前の人に何を聞くか考えておこうと思います。
- 自分のトリセツの発表の課題では、その人の性格を知れることに加えて、質問者の方との掛け合いもとても面白かったので、今後もこの取り組みが楽しみです。こういう機会を使っている方とされる方との距離を縮めるいい方法だなと思いました。
- 今回の授業でみんなの弱点や良いところなどを知れてめっちゃくちゃ面白かったです。インタビューするっていうのもする側とされる側との距離を縮めるいい方法だなと思いました。
- 今日のトリセツのリレーインタビューで、まさか自分がインタビューするとは思っていなかったのととても緊張しました。授業前にみんなのトリセツを見ていたけど、一人一人個性があつてとてもおもしろかったです。
- トリセツがとても面白かったです。自分のトリセツで書くことがなくて悩むほど沼にはまり困りました。

といったように、学生達は、トリセツ・インタビューを面白がっていた。ステイ・ホームが続き、いつになく人との交流を渴望していた時期であり、特に1回生にとっては、大学で新しい友達を作りたい時期であったので、他者への関心が向いていたように感じた。

トリセツ・リレーインタビューは、ロジコミ・メソッドのいくつかを組み合わせ、アレンジして実施したものであるが、もっとも手ごたえ得た実践例の一つ

であった。

IV. おわりに

2013年度、当時同志社大学大学院の総合政策科学研究科の教授であった中野民夫氏の元で、筆者も、大教室での参加型授業の試みを学ぶ機会を得た。それ以来、担当する講義でのアクティブ・ラーニングの試行錯誤を続けてきた。並行して、成熟社会研究所のプロジェクトメンバーと共に、数年にわたり、アクティブ・ラーニングの実践のチエとコツを集めた「ロジコミ・メソッド」を開発に携わり、2019年の秋にロジコミ・メソッドが冊子として誕生したⁱⁱ。以来、ロジコミ・メソッドを、色々な場面で活用してきた。

本研究ノートでは、2020年度を振り返り、講義の中で、どのようにロジコミ・メソッドの活用したのか、具体的な実践例を取り上げて紹介した。2020年の春は、講義が全面オンラインであったが、その中でも、ロジコミ・メソッドのいくつかを組み合わせ、アクティブ・ラーニングを実践した中で、効果をあげたものもあった。その中の一つが、3章で事例としてあげた「トリセツ・インタビューリレー」である。メソッドを組み合わせ、アレンジすることで、様々な活用方法の可能性があることがわかった。個人的には、まだまだ、ロジコミ・メソッドを活用しきれないので、ツールを取り込むなどしていきたい。また、ロジコミ・メソッドの効果についての測定を、定量的にしていくことも課題である。

今後の展開として、ロジコミ・メソッドを、広く活用してもらうために、学生、そして、教員の声を聴くことが大事である。そのために、成熟社会研究所として、学生ロジコミ・モニターを募集し、ロジコミ・メソッドを、講義に限らず、課外活動・学外活動などで使ってもらい、どんな場面で役立ったか、どんなものがあれば役立つかなどの意見を出してもらうことを始めた。また、教職員向けには、教育サロンⁱⁱⁱにヒントを得て、ロジコミ・サロンを定期的開催する予定である。そのサロンでは、ロジコミ・メソッドを紹介するだけでなく、アクティブ・ラーニングを実践するにあたり、どんな悩みがあるのかを意見交換しつつ、アクティブ・ラーニングの実践例を学び、ロジコミ・メソッドの活用方法についても意見を出し合う場とした。

参考文献

- i 追手門学院大学 成熟社会研究所編、2020「一人で思う、二人で語る、みんなで考える」岩波ジュニア新書
- ii 今堀 洋子、2020「オンラインライブ授業におけるアクティブ・ラーニングの試み」2020年度私情協 教育イノベーション大会資料、196頁
- iii 池田輝政・松本浩司編、2016「アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ」ナカニシヤ出版

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録

——赤しそクラフトビール商品化までの産学連携と学生の成長の軌跡——

中 川 啓 子

I. はじめに

追手門学院大学成熟社会研究所の学生研究員らが企画から仕込みまで関わった、赤しそクラフトビール「しそとことん」が2020年10月15日に発売開始された（酒税法上は発泡酒となる）。本学のある茨木市の名産・赤しそ（見山地域の特産品）を副原料に、小豆島のビール醸造所である「まめまめびーる（小豆島町坂手）」が製造した、茨木市と小豆島のコラボ商品となっている。

この一連の企画は、「小豆島プロジェクト」として2016年に始動した成熟社会研究所の研究調査活動が一つの形となったものである。

プロジェクトでは最初から商品開発やビール作りを目的にしていたわけではない。学生と島民との関わりから生まれた思いや苦労が、結果的に茨木市と小豆島の「コラボクラフトビール」という形で実を結んだのである。

このレポートは、約4年半に及ぶ小豆島プロジェクトを振り返りながら、「しそとことん」の商品化から流通までを記すと共に、関わった学生研究員たちの活動と成長の軌跡を追うものである。

II. 第1期調査（2016年度）

2-1. 共同研究によるIターン・Uターン調査

プロジェクトの始まりは、2016年10月に遡る。

成熟社会研究所が、小豆島地方創生有識者懇談会の運営事務局であった株式会社メッツ研究所との共同研究調査として、学生による島民インタビューとフィールドワークを実施したのが最初である。

小豆島（香川県）は瀬戸内海では淡路島に次ぐ面積を持つ島で、オリーブやごま油、素麺などの特産品が全国的に有名である。また、茨木市と小豆島町は姉妹

都市という関係でもある。

※1988年（昭和63年）10月2日、茨木市と香川県内海町（現在の小豆島町）が提携。

その小豆島を対象に、共同研究では、学生（都会に住む若者＝島にとって観光客であり将来的なIターン者候補）が島をどう見て、どう感じるかをテーマに据え、当時の2年生6名（男女各3名）がグループに分かれて島のIターン者・Uターン者を対象としたインタビュー調査を行った。

実はこの調査の際に、後に「しそとことん」の製造を行うまめまめびーるの中田雅也氏と出会い、インタビューも実施していたが、この時にはまだビール作りという話は全く出ていなかった。

学生メンバーは、調査を通じて小豆島の風景・産物・島民の魅力に触れ、調査結果については、学生が中心となって『若者からみた小豆島の生活、芸術祭、Iターンについて～その課題と可能性についての調査研究報告書』としてまとめ、先に述べた有識者懇談会に提出した。

2-2. 学生の自主的訪問

この時に調査に関わった6名の学生は、それぞれ4名と2名の友達グループであったが、4名グループの学生ら（男女各2名、初代メンバーと呼ぶ）は、調査をきっかけに小豆島に惹かれ、翌2017年10月、プライベートで小豆島に旅行している。島では調査の時にインタビューをさせていただいたIターン者の方々（まめまめびーるの中田氏を含む）と再会し、島を案内していただいたり、泊めていただいたりして、随分とお世話になったことを後から聞いた。旅先で島の話も色々教えていただき、その中で、学生らは、島の伝統的行事である「秋祭り」の担い手不足の問題に強く関心を持った。

「秋祭りの担い手不足の解消を、自分たち学生が手伝えないか」

その思いを学生から聞き、成熟社会研究所として、小豆島との連携プロジェクトを再び実施する方向に動くこととなった。

Ⅲ. 第2期調査（2017～2018年度）

3-1. 祭りからビール作りへ

2017年度末から、1期調査時と同じく株式会社メッツ研究所との共同研究調査という形で、2期調査がスタートした。

2018年3月、プレ調査として小豆島に渡り、「秋祭り」をテーマに絞って、ある集落の祭りの中心的担い手や町役場の担当者など、関係者を中心にヒアリングを行った。しかしここで目の当たりにしたのは「島外の若者が伝統行事にいきなり参加することは難しい」という、ある意味当たり前とも言える現実であった。ここで一つの壁に突き当たった学生メンバーであったが、その後程なく、彼らから新たな企画が提示された。

それが、「小豆島でビール作りをする」という、「しそとことん」開発に繋がるプロジェクトであった。

祭りへの参加がすぐには出来ないことが判明し、次の展開を考える学生らに、まめまめびーるの中田氏から「よかったら一度うちでビールでも作ってみないか」という提案があり、学生は二つ返事で承諾した。このビール作りを、島との信頼関係を築ききっかけにしたいと考えたのだった。自分たちが掲げた「祭り」というテーマを一度見失い、学生メンバーが落ち込み、次の展開を考えられなくなるのでは、との心配は杞憂に終わった。

茨木市と小豆島町が姉妹都市であることから、学生からは茨木市の特産品を使ったビールにしたいとの希望があり、「見山の赤しそ」を提案したのも学生メンバーだった。併せて、クラフトビールをテーマとしたイベントへの出店も目標の一つとして加わった。

3-2. 地場産業調査の実施

ビールの企画が立ち上がるとともに、島の様々な地場産業を巡る調査も行われた。これは、プロジェクトの本来の目的である「秋祭りに参加するための島民との関係づくり」や「島の活性化」に繋がるものとして、学生が島の地場産業や生活を体験・体感する「産業体験インターンシップ」なども検討していきたいと考えたからである。

2018年度は7月と9月にそれぞれ1回ずつ島に渡り、佃煮製造業、製塩業、宿泊業などに関わる方々を

訪れ、ヒアリングと見学をさせていただいた。どこでも概ね、若者が島に関わっていくことには好意的・積極的であった。

3-3. 次代への引継ぎ

また、この年の10月に開催された本学の大学祭（将軍山祭）の学生プレゼン大会では、プロジェクトメンバーが出演し、見事優勝している。寸劇を交えた楽しく分かりやすい発表で、小豆島の魅力とビール作りの企画を在学生らに伝えた。

2019年3月、4回生であった初代メンバーは卒業を迎え、彼らの後輩であった新3回生に活動は引き継がれることとなった。

Ⅳ. クラフトビール企画発案へ（2019年度）

4-1. ビール作りの始まり

2019年度は、ビール作り企画を実現するため、その具体化に向けて動いた年であった。二代目となった3回生4名（男女各2名）は、先輩である初代メンバーと元々面識があったことで、多少の話は聞いているものの、4月の時点では小豆島のこともビール作りのことも具体的にはほとんど分からない状態からのスタートであった。

そこでまず島を訪問し、関係者の方々と会って話し、小豆島を体感・実感することから、活動は始まった。

4月の訪問では、まめまめびーるの中田氏との打合せや、島民ヒアリング、現地フィールドワークを経て、次第に島を知り、ビール作りを具体的にイメージできるようになった。

4-2. 秋祭りの見学調査

また、10月は秋祭りの時期に訪問し、実際に祭りを見学し、同じく島との連携活動を推進している香川大学の学生とも交流することができた。目の前で繰り広げられる秋祭りの迫力を感じながら、改めて、プロジェクトの目的を認識したのではないだろうか。

4-3. 副原料としての赤しそ

ビール作りについては、副原料の調達と下処理が、この年の大きな出来事であった。

副原料である赤しそは、6～7月に収穫期を迎える。7月、見山の郷施設交流組合（茨木市）の協力を得て赤しそ16kg（根・茎付き）を入手し、大学の会

議室を使って、学生メンバーが約3時間、葉を茎から外す下処理作業を行った。これには著者も参加したが、赤しその香りに包まれながらも指先がしその色素で真っ黒になり、取っても取っても終わらない、地道な手作業であった。外した葉は、新聞とビニールで包み、冷蔵便にて島に直送した。

7月はビール最盛期かつ繁忙期にあたり、まめまめびーるですぐに試作には入れないとのことで、赤しその葉は冷凍状態で翌年2月まで出番を待つこととなった。

4.3. その他の取り組み

この間、先に述べたように学生らは島に秋祭りの見学調査に行き、成熟社会研究所は中田氏を本学に招いての学生メンバーとの座談会（シェアラボIターン起業家編 2019.12.17）を開催している。

また、日本離島センターの「令和2年度 離島人材育成基金助成事業（活動助成型）」にも応募し、採択され、2020年度の活動資金として、助成金を獲得した。

新メンバー参入の動きもあった。二代目メンバーから声を掛けられた当時の2回生5名が、三代目メンバーとして加入、商品化に向けて二代目と三代目の計9名で進めていくこととなった。

V. 商品化に向けて（2019～2020年度）

5.1. ビールの仕込み作業

2020年2月、いよいよ赤しそビールの仕込みを開始することとなり、二代目・三代目のメンバーのうち8名が小豆島のまめまめびーるを訪問した。3月からは新型コロナウイルス感染拡大の影響で学生の課外活動なども制限されたため、2月のこの時期にギリギリのタイミングで仕込みに参加できたことは幸運だったとしか言えない。

まめまめびーるでは、「しそを洗う」「麦芽を粉碎する」「釜で煮て混ぜる」「赤しそを入れて茹でる」といった一連の仕込み作業に関わらせていただいた。学生にとっては全てが初めての体験であり、実際のビール作りというものを学ぶ機会にもなった。

最初に抽出された赤しそビールはオレンジがかった色味で、まだ冷えておらず温かな状態だったが、爽やかな風味で飲みやすかったとのことだった。



図1 出来立ての赤しそビール



図2 麦芽粉碎作業を手伝う学生（Instagramより）

5.2. 商品名とラベルデザイン

商品化にあたって、重要なものの一つが「商品名」である。

赤しそビールの名称である「しそとことん」は、学生メンバーの一人が名付け親となった。「しそをとことん（ふんだんに）使ったビールだから」という意味を込めてのネーミングで、聞こえもよく、また、ひらがな表記で優しいイメージの名前となった。

また、ビールラベルのデザインも学生が担当した。二人の学生から出されたデザインイメージを合わせ、まめまめびーるでラベルにさせていただいた。赤しそをモチーフとし、その香りが伝わってくるような柔らかく親しみやすいラベルが出来上がった。



図3 完成した「しそとことん」とラベルデザイン

VI. 販売・広報活動（2020年度）

2月末に仕込みが完了したビールは、330ml 瓶にして約250本分（試飲用を除く）の分量であった。3ヶ月程度寝かせた後、6月頃から発売を予定していたが、コロナ感染拡大が収まる様子は無く、醸造元のみめまめびーるもその影響を受けた結果、赤しそビールの販売は秋頃まで待つこととなった。

6-1. SNS 等による広報活動

学生の方も対外活動が制限される中、まだ現物が手元に無い状態での営業活動は難しく、発売できるまでの期間はSNSなどを使った広報活動の準備と実施を中心に進めることとした。

SNSとして新たに立ち上げたものは、「Instagram」「Twitter」「Facebook」の3つである。【茨木×小豆島コラボプロジェクト】というアカウントを設定し、「しそとことん」の宣伝はもちろんのこと、ビール作りのレポート、先輩メンバーから伝え聞いているプロジェクトのこれまでの活動、小豆島のPRなどを投稿している。プロジェクトの認知度を上げるとともに、小豆島のファン拡大につなげたいと考えている。

また、プロジェクトのPRチラシや、ビール宣伝に特化したチラシの制作も行い、メンバーがデザインを担当した。



図4 学生が作成したビールのチラシ
（左上のマークはSNSのロゴマーク）

6-2. 営業活動と販売店舗の確保

スローペースで活動を継続する中、9月に試飲用のビールが届き、いよいよ発売に向けた段取りが整ったということで、販路獲得に向けて動くこととなった。店舗訪問は、過去に追手門学院大学の「日本酒プロジェクト」で関係のあった地元茨木市の酒屋「かどや酒店」を訪問するところから始まったが、店主のご好意で程なく販売取り扱いが決まった。こちらのお店には、販売だけでなく、取材やイベント出店にも繋げていただき、大変お世話になった。

小豆島のみめまめびーるでの店舗及びオンライン販売は10月15日、茨木のかどや酒店での店舗及びオンライン販売は11月12日、それぞれスタートした。茨木市内での販売価格には送料などが上乗せされることで通常のクラフトビールよりは高額の値段設定となっていたため、どこまで購入してもらえるだろうかという懸念はあったが、店舗に掲示したポスターなどの効果もあったのか、最終的には2ヶ月ほどで在庫はほぼ完売した。

6-3. 各種メディアからの取材対応

またこの間、取材も複数受け、以下のような媒体で紹介記事が掲載された。

- ・大学ジャーナルオンライン (WEB 2020.10.27)
- ・サンケイリビング北摂版 2020.11.20 号
- ・いばらきジャーナル (WEB 2020.11.20)
- ・日経新聞「キャンパス発この一品」(2020.11.25 朝刊)

大学内での動画や広報誌の取材も受けており、動画は Youtube の追手門学院大学公式チャンネルで配信され (2021.2.10 時点の再生回数は 608 回)、広報誌「BRIDGE」については次年度の春頃に発行される号に掲載される予定である。



図5 動画による配信

(追手門学院大学公式チャンネルより)

6-4. いばらき青空マルシェでの販売活動

販売数こそ多くはないが、販売活動として印象に残るのは、茨木市民会館跡地の IBALB@ 広場で開催された「いばらき青空マルシェ (茨木市主催)」での出店である。開催日の1週間前に急遽決まったため、学内での手続きなどを急ぎ何とか学生の活動許可を取り付けた。出店者のカフェ店舗前の場所をお借りして、感染対策をしっかりと行い学生メンバーが35本限定で販売した。

酒販免許の関係で、開栓して販売することが必要だったこともあり、昼間の親子連れが多いイベントではなかなかアルコールは売りにくく、売上本数は最終的に31本であった。しかし飲んだ方からは好評であり、持ち帰りができるならもっと買いたいと言う人もおり、市内のどこで売っているのかと尋ねられることもあった。

販売をしながら、先に記載したビールのチラシや小豆島の観光協会から取り寄せたパンフレットなども配布し、広報活動に努めた。



図6 いばらき青空マルシェでの販売風景



図7 いばらき青空マルシェでの販売風景

6-5. 授業での取り組み

メンバーの一人は大学の授業で小豆島プロジェクトを取り上げた (地域創造学部「地域づくりと環境」2020.10.20)。小豆島と茨木市の関係性から、現在の取り組みと今後の展望までをまとめて、幅広く紹介し、受講した学生からは「姉妹都市であることを初めて知った」「小豆島に興味を持った」といった声が寄せられた。これもまた、プロジェクト周知および活動発展の一助となったといえる。

6-6. 産学連携サロンでの発表

2021年1月19日には、オンラインで開催された産学連携サロン (茨木市主催) において、学生メンバー3名と著者が発表を行った。「茨木市×小豆島町 赤しそクラフトビールができるまで」と題して、2016年からのプロジェクトの軌跡、ビールづくりや広報販売

活動と今後への思いなどを、参加した大学の産学連携関係者や地元企業の方々に伝えることができ、反応は上々であった。発表に向けて行ったプレゼン練習では、原稿を読んで固くなりあまり自分の言葉で話せていなかった学生メンバーであったが、いくつかのアドバイスを伝えた後、本番では見違えて生き生きとした発表を行ったことは印象深い。

発表を担当した3年生の学生3名は、後に次のような感想を寄せている。

学生A「これまでのプロジェクトを振り返ることができたのと、色々な方から質問や、感想をいただく中で、なぜやっているのかを改めて考えるいい機会になったので、参加してよかったです」

学生B「伝えたい事を伝わった事が一致することはなかなか難しいと感じていたが、今回の発表ではしっかりと伝わったので嬉しかった。プロジェクト活動が少しずつ地域の中での話題になっている実感があったので、今後も精力的に活動していきたいです」

学生C「今まで、プロジェクトを知らない人たちでさらに大人の方達に評価していただける事がなかったので、すごく刺激的で、さらにやる気が増しました。話すのも緊張しましたが、とてもいい経験になりました」

VII. 今後に向けて

小豆島プロジェクトは今後、次の3つを目標に進めていくこととなる。

-
- ①プロジェクトの維持継続
 - ②秋祭りへの参加
 - ③小豆島でのインターンシップの実施
-

①については、このプロジェクトが茨木市と小豆島の関係をつなぐ存在であり続けるため、まずは新規メンバーへの引継ぎをしっかりと行うことと、ビール作りの次の事業を何か創出することが必要となる。

②③については、「OB名刺の開発」「Uターン者との連携強化」「学生研究員主催セミナーの開催」などを実施して目標に近づいていきたいと考えている。

OB名刺はこれまでプロジェクトに関わった卒業生メンバーが使うもので、小豆島の「関係人口」となり交流を続けてもらいたいという思いがある。また島に強いこだわりを持つであろうUターン者と連携することによる新しい展開も考えたい。さらにインターン

シップ実現に向けて大学内でセミナーを開催することで、学内に新たな「小豆島ファン」を生み出していく。

大阪の大学に通う学生が、小豆島を訪れる時に、「ようこそ」から「おかえり」と言われるような存在になり、新しい島民としての仲間入りができるような、そんなシーンを目指して、プロジェクトは来年度も続いていく。

これらは全て、学生メンバーが考え、立案しているプランである。

成熟社会研究所のプロジェクトでは、学生の意向や活動を尊重し、様々な場面で学生自身が思考して動くように、教職員があまり多くの口出し・手出しをしないことを心がけている。たとえ失敗しても、悩みながら再挑戦し、解決の道を探ることが、成長につながると信じている。

小豆島プロジェクトにおいても、例えば島を訪れしに行くフィールドワークの際に、初回は教職員が同行するが、その後は基本的に学生だけで島に渡る（旅行保険等の必要な保障は手配し、何かあればいつでも連絡は取れる体制にしている）。対外交渉も基本的に学生が行う。成熟社会研究所には活動報告と収支報告がなされるシステムである。

また、本プロジェクトは授業やゼミなどにはあたらない、完全な課外活動で、単位にはならない。それでも学生メンバーが自分たちの時間を使って活動に参加するのは、プロジェクトを自分ごととして捉え、楽しんでいるからだと感じる。

「自分たちに任されている」

「自分たちで考えて行動しなければいけない」

学生がそう認識することで、考え方や行動がワンランクも2ランクも成長していく現場を何度も見ている。

小豆島プロジェクトは、これからも後輩の学生に引き継がれながら、ゴールを目指して発展し、関わる学生自身もまた大きく成長していくであろうと、考えている。

謝辞

赤しそクラフトビール「しそとことん」の実現に向けて、多大なるご協力をいただいた、まめまめびーるの中田夫妻、見山の郷施設交流組合の皆様、かどや酒店の角本稔様、小豆島町の皆様ほか、関わってくださった多くの皆様に、厚く御礼申し上げます。

【資料編】**■メディア掲載情報など**

大学ジャーナルオンライン

「追手門学院大学、地元・茨木市と姉妹都市の小豆島町を繋ぎ赤しそのクラフトビールを商品化」(2020/10/27)

<https://univ-journal.jp/59524/>

リビング北摂 WEB

「追手門学院大×姉妹都市が特産品で新商品を開発」(2020/11/19)

https://mrs.living.jp/hokusetsu/event_leisure/article/4023015

いばジャル

「姉妹を結ぶ赤いしそ。クラフトビール「しそとことん」できました！」(2020/11/20)

<https://ibajal.com/gourmet/20201120siso/>

日経新聞朝刊

赤シソ配合クラフトビール（追手門学院大）～シソに「とことん」こだわる（2020/11/25）

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO66572260U0A121C2T>**■SNS 茨木×小豆島コラボプロジェクト****【Twitter】**<https://mobile.twitter.com/sdpotemon>**【Instagram】**<https://www.instagram.com/sdp.otemon/>**【Facebook】**<https://www.facebook.com/sdp.otemon>

成熟社会研究所の事業

成熟社会研究所は、「すべては学生の成長のために」をミッションとして各種プロジェクトを遂行している。研究所として2020年度に取り組んだ主な事業（プロジェクト）は、以下の2つである。

学生のための
ロジコミ・メソッドの開発
(ロジカルコミュニケーション)

地域連携・交流事業
小豆島プロジェクト

成熟社会研究所 活動報告

○：イベント・講座・講演 ◆：学生研究員による活動 ●：打合せ □：その他

2020	4.16	●成熟社会研究所 所員会議
	4.28	●オンライングループワーク (miro) トライアル
	5.18	●ロジコミ・メソッド 書籍化に向けての打合せ
	5.25	●ロジコミ・メソッド 書籍化に向けての打合せ
	7.1	□「追手門学院大学 教育後援会会報」第106号掲載
	7.8	◆小豆島プロジェクト 学生ミーティング
	7.16	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ01
	7.17	□『一人で思う、二人で語る、みんなで考える 実践ロジコミ・メソッド!』(岩波ジュニア新書) 発行
	8.6	●成熟社会研究所 所員会議
	8.31	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ02
	9.4	○2020年度 私情協 教育イノベーション大会 (主催：公益社団法人私立大学情報教育協会) 「オンラインライブ授業におけるアクティブ・ラーニングの試み」(今堀洋子)
	9.6	◆小豆島プロジェクト 学生ミーティング
	9.11	●ロジコミ・メソッド キャリア開発センターとの打合せ
	9.16	◆小豆島プロジェクト Instagram 開設・投稿開始
	9.18	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ03
	9.20	◆小豆島プロジェクト 販売広報活動(かどや酒店)
	10.2	◆小豆島プロジェクト Facebook 開設・投稿開始
	10.5	◆小豆島プロジェクト Twitter 開設・投稿開始
	10.12	□小豆島プロジェクト プレスリリース配信
	10.15	□小豆島プロジェクト 赤しそクラフトビール「しそとことん」販売開始(まめまめびーる)
	10.19	●ロジコミ・メソッド 学生モニターと評価に関する打合せ
	10.23	○第1回ロジコミ・サロン ゲスト：池田輝政氏(U&C ストラテジー代表)
	10.27	□小豆島プロジェクト メディア掲載(大学オンラインジャーナル)
	10.29	◆小豆島プロジェクト 販売広報活動(かどや酒店)
	10.29	◆小豆島プロジェクト 取材対応(サンケイリビング)
	11.4	●ロジコミ・メソッド 学生モニターと評価に関する打合せ
	11.12	□小豆島プロジェクト 赤しそクラフトビール「しそとことん」販売開始(かどや酒店)
	11.13	◆小豆島プロジェクト 取材対応(いばらきジャーナル)
	11.16	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ04
	11.19	□小豆島プロジェクト メディア掲載(サンケイリビング北摂版201120号)
	11.20	□小豆島プロジェクト メディア掲載(いばらきジャーナル)
	11.21	◆小豆島プロジェクト いばらき青空マルシェ出店@IBALAB 広場
	11.25	□小豆島プロジェクト メディア掲載(日経新聞朝刊「キャンパス発この一品」)
	12.4	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ05
	12.13	◆小豆島プロジェクト 学生ミーティング
	12.15	□「ロジコミ・メソッド」ハンドブック 改訂3版 発行

2021	1.19	○◆産学連携交流サロンでの話題提供（主催：茨木市商工労政課） 「茨木市×小豆島 赤しそクラフトビールができるまで」（学生研究員・中川啓子） 「成熟社会研究所の活動事例」（佐藤友美子）
	1.21	●ロジコミ・メソッド 学生モニター説明会に向けての事前打合せ
	2.1	○ロジコミメソッド 学生モニター説明会／モニター調査（ライトユーザー版）開始
	2.5	●ロジコミ・メソッド 全体打合せ06
	3.30	●成熟社会研究所 紀要5号の発行



小豆島プロジェクト
（赤しそクラフトビールしそとことん）
2020.10.15



小豆島プロジェクト
（かどや酒店にて@ Instagram）
2020.10.29



小豆島プロジェクト
（いばらき青空マルシェ出店）
2020.11.21



『一人で思う、二人で語る、
みんなで考える』
岩波ジュニア新書
2020.7.17 発行



新刊案内チラシ
「一人で思う、二人で語る、
みんなで考える」
2020.7.17



第1回
ロジコミ・サロン
2020.10.23



第1回
ロジコミ・サロン
2020.10.23 チラシ

執筆者紹介（掲載順）

齊藤 一誠（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員，国際教養学部教授）
佐藤友美子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所長，地域創造学部教授）
今堀 洋子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員，地域創造学部准教授）
中川 啓子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員）

追手門学院大学 成熟社会研究所 所員

所 長 佐藤友美子（追手門学院大学 地域創造学部教授）
所 員 齊藤 一誠（追手門学院大学 国際教養学部教授）
所 員 村上 亨（追手門学院大学 経済学部教授）
所 員 今堀 洋子（追手門学院大学 地域創造学部准教授）
所 員 神吉 直人（追手門学院大学 経営学部准教授）
所 員 中川 啓子
所 員 神谷 聡子

成熟社会研究所紀要 第5号

2021年3月30日 発行

発行所 追手門学院大学 成熟社会研究所
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1-15
電話 (072) 665-5068

印刷所 友野印刷株式会社
